

独ソ戦・世界大戦とドイツ・西欧ユダヤ人の東方追放 ——「ユダヤ人問題最終解決」累進的急進化の力学——

永 岑 三千輝

はじめに

1. 1941年秋の過渡的移送措置再開と諸困難——「冬の危機」へ
2. ドイツ・ユダヤ人「東方」移送の諸局面——1941年10月～42年2月
3. 独ソ戦から世界大戦への展開とヴァンゼー会議
4. ドイツ・西欧から総督府への強制追放——1942年
5. 1942年夏のユダヤ人殺戮急進化

むすびにかえて

文献リスト

地図（ドイツとプロテクトラート1941-1945、絶滅収容所）

はじめに

これまでの研究で単にソ連ユダヤ人の殺戮作戦だけではなくて、ヨーロッパ・ユダヤ人絶滅政策への大々の転換の画期は、1941年12月とする筆者の1994年以来的の見地が再確認されたものとして、最新史料集に依拠して今日の歴史学の到達点を見てきた。それは独ソ戦の泥沼化、第三帝国最初の「冬の危機」と占領地域の人的物的資源の窮迫、第三帝国敗北への戦局転換、その危機状況における対米宣戦布告、世界戦争への突入に呼応する転換であった（永岑1994, 185-261; 2001, 127-300; 2022a, 219-251; カーショール2016b, 489-

524)。

この移送政策から絶滅政策への展開の第一局面は1941年8月から9月にかけての電撃戦挫折・長期戦化の政治軍事情勢で発生した。ヒトラーの大々的ヨーロッパユダヤ人絶滅命令と解釈されることもある1941年7月31日のゲーリング命令——起案ハイドリヒ、ゲーリング署名——「ヨーロッパ・ユダヤ人問題の全体的解決を準備するように」(VEJ 3/196)——について、8月15日の時点でヒトラーはなお「全体的解決はソ連に対する征服戦終結後に具体化される」と宣伝省(次官)に申し渡していた(VEJ 3/203)¹。

しかし、ソ連電撃的征服の展望喪失はヨーロッパ・ユダヤ人に対する政策の変更をもたらした。その戦局は、ユダヤ人政策の累進的過激化を規定する。1941年7月31日のゲーリング令、8月初旬のソ連におけるユダヤ人殺戮の過激化(ユダヤ人老若男女の無差別殺戮の拡大)をもってヒトラーがヨーロッパ・ユダヤ人の大々の絶滅命令を発した証拠と見る説、すなわち7月末-8月初旬説(栗原優 1997)はこの史実からも否定されていると

¹ なお、念のために付言しておけば、欧米そして日本で論争の的となったのは、ヒトラーの大々の絶滅命令なるものの存在・内容・対象と発令時期に関してである。1941年夏、独ソ戦開始からはじまったユダヤ人の大量殺戮自体をヒトラーの大々的なヨーロッパ・ユダヤ人絶滅命令の発動と見るのか、短期電撃的ソ連征服戦争と結びついたソ連体制打倒、ユダヤ=ボルシェヴィズム殲滅作戦の枠組みで考えるのかという点での違いである。ナチス・ドイツの対ソ戦・ユダヤ人殺戮がいかに苛烈であったとしても、この段階まではヨーロッパ戦争とアジア・太平洋戦争は直接結びついていなかった。その意味で厳密な意味での世界戦争に突入していなかった。「ヨーロッパ・ユダヤ人問題の全体的解決」はまだ俎上にはのぼっていなかった。41年12月、日本の真珠湾攻撃・対米戦争開始、それに呼応したヒトラーの対米宣戦布告、これをもってヨーロッパとアジア太平洋の戦争がアメリカ参戦を介してつながり、42年1月1日の26か国連合国宣言となった。この段階、すなわち、世界が文字通りグローバルな対決軸で死闘を決意する段階こそは、ヒトラー、ヒムラー、ハイドリヒが「ヨーロッパ・ユダヤ人問題の最終解決」を決断する画期である。そのため、8月はじめから延期されていた中央諸官庁次官による連絡調整会議(ヴァンゼー会議)を開くことになった。これが41年12月説の立場である。「これ以上延期できない」としたハイドリヒのヴァンゼー会議招集日は、1942年1月8日である。

見るのが拙稿の立場である。

【ヘルベルト「1941年10月末～11月末」説の批判】

なお、最近翻訳されたヘルベルトの概説書『第三帝国——ある独裁の歴史』では、「ユダヤ人の命運について決定的な決断がなされた時期は、1941年10月末から11月末までのあいだだと断言できる」²としている。41年7月説を否定している点で、私の一貫した立場と同じである。

しかし、ヘルベルトが41年10月末から11月末までだと「断言」する根拠としている事実は、彼が引用するヒトラーの言説を厳密にみても、「断言」の証拠とはなりえない。

第一に、ヘルベルトが「断言」の証拠とするのは10月25日のハイドリヒとヒムラーに対するヒトラーの「主張」である。すなわち、ユダヤ人、「この犯罪者の人種は世界大戦の200万人の死に責任がある。今度ふたたび10万の死に責任がある」と³。

世界史の教書書やごく普通の歴史叙述は、1939年9月1日を第二次世界大戦の開始としている。だが、1939年9月に始まったのは、ドイツのポーランド侵略戦争である。これに呼応するのが英仏からの対独宣戦布告であった。すなわち、この時点では、戦争はヨーロッパ戦争に過ぎなかった。戦争への突入は、これらヨーロッパ主要国間にあった。それは、いまだ、世界戦争ではなかった。他方で東アジアの戦争、日本の中国侵略戦争・アジアにおける日本帝国主義の膨張・占領地拡大は、この時点ではヨーロッパ

² Herbert [2016] 91 (ヘルベルト [2021] 184)。

³ この文章の邦訳では、世界大戦の前に、(第一次)と訳注を加え、「今度ふたたび (jetzt wieder)」の「今度」についても、「今度 (第二次世界大戦)」と「第二次世界大戦」という訳注を入れている。しかし、この注釈・訳注はミスリーディングである。そもそも、1941年10月25日時点で、世界大戦になっていなかった。ヒトラーをはじめとする同時代人は、「第二次世界大戦」という意識・概念——予感・予測はあったとしても——を持っていなかった。

の戦争と直接結びついてはいなかった⁴。ヨーロッパ戦線とアジア太平洋戦線が直接結び付くのは、1941年12月の真珠湾攻撃、これに呼応するヒトラーの対米宣戦布告においてであった。この時点こそ、世界大戦というグローバルな対決軸の形成である。ヒトラーが「第二次世界大戦」という言葉を使わず、「今度ふたたび」という表現を使っていることを軽視してはならないと考える。

第二に、ドイツ軍戦死者の数が問題となる。ポーランド侵略から電撃戦勝利まで、ドイツの戦死者は極めて少ない。ドイツの戦死者が増えたのは独ソ戦の激戦においてであった。41年10月下旬までの独ソ戦の現実を踏まえて、ヒトラーはドイツの戦死者（Tote）を10万（Hunderttausend）としている⁵。

ヒトラーは12月11日の国会演説で、ドイツの戦死者を162314人とした（12月5日までの数値として）⁶。10月25日からこの演説までの一か月ほどの間に何が起きていたのか。モスクワ攻略作戦が失敗に帰し、12月初めからソ連軍の反撃が始まった。まさに第三帝国最初の「冬の危機」である。6月22日から4か月間に10万の死者。これに対して、10月末から11月末まで（厳

⁴ 日本帝国主義の戦線・占領地の拡大、南部仏印進駐などは、ドイツのソ連圧伏の見通しと関係していた。米英戦争への圧力が強まっていたことは事実である。1941年10月、ドイツ軍がモスクワに迫っていたころ、日本では「たいていの人が、ソビエット（ママ）連邦が負けるものと信じていた」。「ドイツが負けるといいはってゆずらないもの」は、「ぜんぜん気ちがいあつかいされた」（志賀義雄）。アメリカとの戦争が「無謀きわまるもので、かならずや日本の人民をさんたんたる不幸につきおとすであらうことを主張したが、むろんそれで軍国主義者や官僚どもの妄想がとまるものでもなく、やがて十二月、のほせあがったかれらはついに犯罪戦争に突入した」。徳田球一・志賀義雄『獄中十八年』時事通信社、1947、153。

⁵ 邦訳でHunderttausend（単数形）を「数十万」と過大に訳している。この訳し方も、独ソ開戦以降10月25日までの現実に即してみれば、ヒトラーの言説および事実に反していて問題である。国会演説で公然と認めた戦死者数よりもはるかに多い数となっている。

⁶ Domarus [1973] 1800.

密には12月5日)のわずか一か月間にドイツ戦死者はさらに6万2千人以上増えている。いかに厳しい戦いだったかがわかる。

第三に、10月25日、ハイドリヒとヒムラーに対して、「ユダヤ人絶滅」に関して述べたとされる一節は、次のようになっている。「われわれは彼らを泥沢地に送り込むことはできない、などと誰も私に言ってはならない」と⁷。つまり、泥沢地に送りこむことはありうる、と。これは、戦時中中断を命じてきた移送政策——9月に臨時的に「来年春までの」措置を始めたが——今後実施していても問題ないといっているわけである。だから、臨時的に再開した移送・追放政策をみて、「われわれがユダヤ人を根絶するという恐怖が先立つのは良いことだ」と、泥沢地に送り込むこと=移送・追放政策が絶滅に帰結しようとも、そんな先走った恐怖が生じても、かまわない、とハイドリヒとヒムラーに説いているわけである。10月にドイツやウィーンなどから特別措置として開始した移住・追放によって、「恐怖が先立つ」ことは構わない、と。これは、決して、絶滅を決定し、あるいは絶滅を命じている文脈ではない。あくまでも、泥沢地に追放する構想が残存していたこと、基本的には戦後の移送・追放の計画が生きていた段階の言説である。なぜなら、10月25日の段階は、モスクワ攻略に全力を投入していた時期だからである。モスクワ占領に成功し、スターリン・ソ連国家指導部・赤軍に大打撃を与え屈服させるならば、戦後計画としての大々的な移送が可能となる、という見通しが生きていた発想である。

第四に、41年7月31日のゲーリング令に依拠した中央諸官庁調整会議(12月9日)を11月29日に招集したことをヘルベルトは「断言」の根拠としている⁸。しかし、この会議は、日本の真珠湾攻撃とそれに呼応するヒトラー根本政策決定(対米宣戦布告)のために、直前になって延期された。対米宣戦布告をした翌日(12月12日)にナチ党最高幹部(全国指導者や大管区指導者)を前にした演説こそが、ヨーロッパ・ユダヤ人全体の運命に関する

⁷ Herbert [2016] 91 (ヘルベルト [2021] 182).

⁸ Ebd., 92 (同上、184-185).

るものであった。それは、ゲッベルス日記が記すとおりである。この12日の演説におけるヒトラーの発言は、世界大戦とユダヤ人根絶を結び付けている。世界大戦はもはや、預言や推測のレベルではない。「世界大戦は起こったのであり、ユダヤ人の絶滅は、必然的な帰結でなければならない」と⁹。これほど明確な断定はないのではないか。

対米宣戦布告の決定的重要性を評価するのが、12月説である。11月末は、まだ、世界大戦の枠組みは、「予想」や「推測」のレベルである。そもそも、日本の真珠湾攻撃をだれが、11月29日までに予測し得たのか。世界的転換における12月8日（現地時間7日）の意味を過小評価してはならない。これが、12月説の根拠である。ヘルベルトの説は、12月説の根拠を無視しているといわなければならない。ヨーロッパ・ユダヤ人絶滅政策の決定は、世界大戦発動とともに、というべきであろう。ユダヤ人政策の累進的過激化は、世界大戦発動とともにそれまでのレベルから飛躍したのである。

第五に、11月初頭にルブリン近郊ベウジェツに「短時間で多くの人間を殺害することができる、常設の絶滅施設の建設が始まった」¹⁰ことを、10月末から11月末までの絶滅決定の根拠としている。しかし、これも、臨時措置としての戦時中移送強行が、この間に予定した移送先で受け入れ拒否の抵抗にあったことの打開策とみるべきである。これをもって大々的絶滅政策の決定の根拠とはなりえない。8月から9月のソ連現地でのユダヤ人殺害方法＝射殺がぶつかった困難に対応する手段としての一酸化炭素＝毒ガス殺の選択である。ウッチ（リッツマンシュタット）近郊ヘウムノ（クルムホーフ）における「絶滅施設」も——投入は12月初め——、臨時的な戦時中移送強行に対応するものがある。それはボックス型（自動車排気ガス）移動ガス室3台の投入であって、「絶滅施設」でイメージされるような固定的な建造物ではない。そもそも、移動型ガス室は、戦線の移動が激しいソ連に投入予定で開発されたものであった。ヘウムノへの臨時移送強行が、

⁹ Ebd., 91（同上、183）。

¹⁰ Ebd.（同上、182）

現地親衛隊からの受け入れ拒否にあって、急遽、本来の投入予定地ではなく、臨時措置として投入されたのである。

ヒムラー、ハイドリヒの親衛隊警察機構、宣伝相ゲッベルスなどに対ソ戦継続中のユダヤ人移送実施を求めさせた要因は、つぎのようなものである。第一にドイツ「国内戦線」から出されてくるユダヤ人追放圧力を削減する必要があった。第二に、ドイツ占領支配下における政治的危機——保護領（プロテクトラート）ベーメン・メーレンにおけるストライキなどの不穏な情勢があった。その鎮圧のため、「鉄の心臓」のハイドリヒを保護領に投入した。すなわち、一方で支配地・占領地の各地からのナチ党幹部のユダヤ人追放要請があった。他方でドイツ占領下ヨーロッパの治安状況の変化を踏まえたヒトラーの意向、「総統のご希望」があった。これらに基づき、41年3月対ソ奇襲攻撃準備に総力を結集するため停止していた移送政策をひとまず「来年春までの臨時的措置」だとして41年9月下旬、再開することを決定したのである。

以上のように、41年8月から9月にかけて、戦局（ヒトラーの征服原理を否定する大西洋憲章の発表、アメリカの一層のイギリス支援）と支配下ヨーロッパの情勢に大きな変化があったことが戦時中ユダヤ人移送の実施に踏み切らせた。しかし、それはあくまでも臨時措置としてであった。

しかも、この臨時移送作戦の戦時中再開は、当初、まだ殺害作戦を意味してはいなかった（VEJ 6:17）。10月6日、ヒトラーは保護領長官付国防軍全権の将軍に対し、保護領からユダヤ人すべてが遠ざけられることになる、「総督府へではなく、もっと東へ」とこの時点では語っていた。同時にベルリンとウィーンからすべてのユダヤ人が消え去ることになると。しかし、目下のところ軍事目的に輸送手段が使われるので、この移送は不可能だとも（VEJ 6/243）。確定的な断固とした政策転換ではなかったのである。

以上のような把握のもとで、本小論では移送再開策が大々的な絶滅政策に転換していく過程・圧力を少し具体的に——叙述が重複する部分もある

が、それだけ重要と考え、煩をいとわず追跡してみよう。

1. 1941年秋の過渡的移送措置再開と諸困難——「冬の危機」へ

国防軍がバルバロッサ指令に従い1941年6月22日対ソ奇襲攻撃を開始したとき、ナチス・ドイツ首脳部は「電撃戦」を目論んでいた。数か月内に、遅くとも冬の到来前に赤軍を屈服させるというわけである。そのような電撃的勝利は、原料・食料ストックを相当に拡充し、それによって短期間に、西部における戦争も有利に決着をつけられると見ていた。

だが、41年晩夏にはヒトラー、ドイツ国防軍の戦略が誤った判断によるものであることが判明した。国防軍がモレンスクを占領した後は、赤軍がドイツ軍のさらなる進軍をかなり長い間阻止することに成功した。モスクワに対する中央軍集団の突撃は、繰り返し延期された。ようやく10月2日に攻撃が始まったが、数週間後には停滞した。補給問題とドイツ兵士の負傷者、行方不明者、戦死者の急速な増加が、たんに軍事的打撃力だけではなく、「国内戦線」の士気も損ねた。第三帝国最初の「冬の危機」到来である（VEJ 6: 14; 永岑 1994, 185-261; 同 2001, 127-300）。

1941年10月2日、17歳のウィーンのユダヤ人少年はユダヤ人外出許可時間が8時間に削減されたことを記し、10月15日に「ポーランド作戦」（ポーランドへのユダヤ人強制追放）が始まるというニュースを母親と叔父がもたらしたことを日記に書いた（VEJ 6/1）。10月4日、プラハ、ウィーン、ヴィースバーデン、カッセル、ミュンスター、ハンブルク、ベルリンの秩序警察（常時緑色制服着用の緑色警察）司令官クルト・ダリューゲは、それぞれの都市の高級親衛隊警察指導者などにユダヤ人（総数20000人）、シンティ・ロマ（ブルゲンラントの5000人）のリッツマシュタットへの強制追放を10月15日に始めることを速達「旧ドイツとプロテクトラートからのユダヤ人疎開について」で知らせた。治安警察・保安部との合意に基づき秩序警察が12人の警察官に一人の将校をつけて輸送列車の警備に当たると

した(VEJ 6/3)。個々のユダヤ人に対する「移住輸送遂行」に関する通知は、親衛隊担当者からユダヤ教共同体を經由して出された(VEJ 6/6)¹¹。

1941年10月15日夕方、ベルリンではゲシュタポがユダヤ人男女1000人以上を住居から強制的に貨物自動車に乗せて、レヴェツォフ通りのシナゴークに連行した。礼拝堂が臨時収容所に替えられた。彼らから時計、装飾品、その他の金属製品およびすべての貨幣が剥奪された。彼らはそこで初めて、三日後にリッツマンシュタット(ウッチ)のゲッターに強制連行されることを知った。同様のことが数日前にウィーンやプラハでも起き、ほぼ同時にデュッセルドルフ、ケルン、ハンブルク、その他の諸都市で起きた。フランクフルト・アム・マインでは臨時収容所に連行される途上、野次馬に唾を吐きかけられ、ののしられ、腐った野菜を投げつけられた。彼らはベルリンのユダヤ人と違って、列車がリッツマンシュタットに到着したときにはじめて強制連行先を知った。ドイツからのユダヤ人の強制連行はこのようにして始まった。41年10月15日から11月4日の間にドイツ、プラハ、ルクセンブルクからユダヤ人を乗せた20列車がリッツマンシュタットに、それから年の瀬までにさらに22列車がミンスク、リガ、それにカウナスに向かった(VEJ 6:13)。

¹¹ 1941年10月9日、迫りくる追放を何とか逃れようと、1935/36年の瀬にイギリスに移住し、37年1月にはUSAに移住できた息子に何度も手紙を書いて助けを求めるあるユダヤ人夫婦の手紙(VEJ 6/7)。この夫婦は結局10月27日、デュッセルドルフからの第一追放列車でリッツマンシュタットに送られ、42年5月にクルムホーフで(すなわちガス自動車で)殺害された(VEJ 6:120)。パレスチナやウルグアイに移住できた子供たちに救出の支援を求め(VEJ 6/15)、それが徒労に終わり、テレージエンシュタットに送り込まれた夫婦。夫はそこで死亡。妻は1944年アウシュヴィッツに追放(VEJ 6:133)。抵抗グループ・クライザウ・クライスを設立したハルムート・ジェイムズ・フォン・モルトケは、妻に宛てた10月21日付手紙で「まったく残酷なニュース」を知るたびに頭痛に苛まれ、ベルリン・ユダヤ人が駆り集められ、シナゴークに閉じ込められ、リッツマンシュタットやスモレンスクに追放されること、「飢餓や寒さで殺される」ということも想像していた(VEJ 6/16)。しかし、当然のことながら、その多くがクルムホーフでガス自動車によって殺害されるなどということは想像もできないことだった。

国防軍の指導的代表者たちや軍需専門家は、ソ連に対する戦争はもはや勝利することができないだろうとはやくも確信するようになった。たとえば、フリッツ・トット——武器弾薬担当大臣——はすでに41年11月、ソ連との講和を要求した。12月初め、ついに赤軍がモスクワ北方で中央軍集団を敗北させる戦況となると、ドイツ側ではヴァルター・フォン・ブラウヒッチュや国民的大衆的に人気のある将軍ハインツ・グーデリアンのような高位軍人の何人かが年の瀬までに解任されるに至った。経済的観点でもソ連からの物資略奪は期待ほどにはいかなかった。例えば穀物の場合、戦利品穀物は独ソ不可侵条約期、すなわち、平時に手に入れていた規模にはるかに及ばなかった。ソ連の側では戦争初年度、軍需生産を増加することに成功した。それに対しドイツでは、国防軍が前もって予定していた戦闘機、戦車、貨物自動車、戦艦などを生産するための石炭や鉄鋼のような戦略的重要原料が不足した。国防軍は厳冬の天候はもちろん燃料・補給問題とも闘わなければならなかった（トゥーズ 2019, 549-579）。

先取りしておけば、41年12月から42年3月末までに723,000人以上のドイツ兵士が死去した。それは敵の武器によるだけではなく、凍傷や疾病によってであった。さらに負傷者や行方不明者も加えると、42年3月末までに国防軍は110万人を失った（VEJ 6: 15）。

こうした「冬の危機」とその後のナチス・ドイツ敗退の第一段階こそが、ヨーロッパ・ユダヤ人問題の「全体的解決」の前提条件となった。ヒトラーの予言とは違って、いやまさにその正反対に、第三帝国の敗退過程こそが、ヨーロッパ・ユダヤ人絶滅過程を規定した。

1941年10月開始の臨時措置的ユダヤ人移送政策は「冬の危機」に向かう独ソ戦激闘の制約下でただちに数々の難問にぶつかった。各地からのユダヤ人排除要求と移送先の受け入れ拒絶諸要因（一方における住宅・食糧不足、燃料不足など、他方における軍需経営への阻害¹²）のせめぎ合い、こ

¹² 詳しくは永岑 [2003] 第4章を参照されたい。

れが移送政策の本格的実施への重要な契機となった（永岑 2003, 117-172）。大きな情勢変化を踏まえ、ハイドリヒが中央諸官庁の次官に12月9日の「ユダヤ人問題の全体的解決についての協議」の招集状を出したのは、11月29日付であった（VEJ 6/47）。

会議直前のドイツ現地時間12月7日に日本が真珠湾を攻撃し、あらたに米国を敵国として太平洋戦争が勃発。その対応でハイドリヒ招集の次官級会議は急遽延期となった。42年1月8日、「もはや延期できない」と再度召集がかけられた。そして、ついに中央諸官庁調整会議が1月20日に開催された（ヴァンゼー会議記念館（編著）2015）。この11月29日と1月8日の間に、「世界戦争が起きた」こと、それがもたらすヒトラー・ナチ党最高幹部におけるヨーロッパ・ユダヤ人政策の飛躍、その重大な意味は、前述の通りである。

【大ドイツ東部リッツマンシュタット、郊外クルムホーフ】

1941年9月18日、ヒムラーはヴァルテガウの大管区長グライザーにドイツと保護領ベーメン・メーレンを「総統のご希望」により可及的速やかに「ユダヤ人から解放するため」、6万人をリッツマンシュタット・ゲッターに移送することを伝えた。しかし、そもそもヴァルテガウの当局者は領内に外部のユダヤ人を受け入れることを可能な限り回避し、むしろユダヤ人をできるだけ東方に追放することを求めている。この2か月前に、ポーゼンの移住センター長ロルフ・ハインツ・ヘップナーは1941年7月16日、アイヒマンに冬にはユダヤ人を全部は養えないので、労働不能ユダヤ人を「何らか迅速に作用する手段で片付ける」ことを提案していた（VEJ 4/314）。後の移送者絶滅への要因（ここでは食糧問題）がすでに指摘されている。

受け入れ条件狭隘化のなかで10月になっての強制移送は、重大な負担増であった。この移送強行は、受け入れ不可能な事情を抱える現地親衛隊幹部ユーベルヘーアと移送責任者アイヒマンとの間に深刻な軋轢を引き起こした。これにはハイドリヒやヒムラーまで直接介入せざるを得なくなった

(永岑 2003, 138-146)。結局は、リッツマンシュタットへの移送者は25000人に引き下げられた。さらに25000人がリガとミンスクのゲットーに連行された (VEJ 6:23)。

リッツマンシュタットに連行されたユダヤ人とジプシー (ロマ) は、郊外クルムホーフ (ヘウムノ) において一酸化炭素ガスで殺害されることとなった。クルムホーフにおける12月初めからの移動型ガス室 (ボックス型自動車への排気ガス注入) の利用による「ユダヤ人問題解決」は、42年6月5日付極秘文書 (一部のみ作成の国家最高機密) によれば、「41年12月から3台で97000を加工」したことを報告していた (永岑 2007, 125)。極秘文書では、現実を隠すために、「人」を使っていない。「もの」として処理したわけである。

【総督府】

1941年9月から12月、臨時的移送政策が「移送」「疎開」を名目としつつ殺戮政策に転換していくにあたって大きな契機となったのは総督府の事情であった。39年9月からの戦闘でワルシャワをはじめ破壊された諸都市がすでに占領下で2年間も厳しい状況に置かれていた。ドイツに併合したポーランド共和国領土から追放されたポーランド人とユダヤ人の受け入れ地としての重圧もあった (永岑 1994, 50-52)。さらに41年8月、ユダヤ人が多いガリツィア地区が総督府に合併された。その上、軍事同盟国ハンガリーが併合したカルパトウクライナからユダヤ人を大量に追放したため、総督府が追加的に何千人も受け入れざるを得なくなった。ソ連のドイツ占領地域に総督府のユダヤ人を追放することはもはやできなかった。ワルシャワのゲットーのような大きな施設の建設も回避し、移動殺戮部隊 (アインザッツグルッペ) が10月初めに1万人ほどを射殺した (VEJ 6:19-20)。

40万人が詰め込まれたワルシャワ・ゲットーは伝染病と高死亡率で41年10月までに悲惨極まる状態となっていた (VEJ 9/14, 15)。しかも、総督府は対ソ攻撃最前線への人的物的輸送の結節点に位置した。対ソ戦における

死活的重要性を持つ地域であった。41年12月16日閣議での総督フランクの発言は総督府の窮状を集約的に示した。彼は総督府のユダヤ人親類も含めて350万人を排除したい、総督府の外に追放したいと訴えた。これに対し、ベルリン中央からは「自分で始末しろ」と突き放されてしまった。総督フランクは閣議総括で「350万人を射殺することはできない、その解決については1月開催予定の会議に」託するしかないとした。総督府次官ビューラーは総督府閣議でのこのフランク総括（永岑 2022a, 243-247）を踏まえ、ヴァンゼー会議（42年1月20日）において「最終解決」の「対象となるユダヤ人250万の大半は労働不能」と断定した。そして、「最終解決」を総督府から開始することを求めた。この総督府からの特別要請は議事録に明記された（ヴァンゼー会議記念館編著 2015, 165-167）。ハイドリヒ主催のこの中央官庁次官級会議の確認に則って総督府ユダヤ人に対する絶滅政策が総督府で開始された。作戦の暗号名はラインハルト作戦であった。それは42年末までにはほぼ完遂された（永岑 2022a, 252-272）。

それではこの状況下、総督府以外のドイツとドイツ占領支配下ではユダヤ人に対する作戦はどのように進められたのであろうか。また、その進展の諸条件はいかなるものであったろうか。ちなみにこの期間は、アウシュヴィッツ・ビルケナウの4つの巨大なガス室・火葬棟建設（42年春開始）がまだ完了していなかった。ビルケナウにはまだ敷地内にあった二棟の農家を改造したガス室しかなかった（永岑 2021）。なお、アウシュヴィッツ・ビルケナウのガス室・火葬棟の稼働と最も密接且つ大々的に関係するハンガリー・ユダヤ人の運命については、別の拙稿（永岑 2022b）を参照されたい。

【ドイツ諸都市への爆撃と「住宅不足」】

1941年10月からの時限的な移送再開方針は、大管区指導者や各地の行政責任者の想像力を刺激し、「ユダヤ人問題の解決」について議論を勢いづかせた。大管区指導者、ウィーンのパルドゥーア・フォン・シーラッハ、ベルリンのゲッベルス、ハンブルクのカール・カウフマンなどは、可及的

速やかなユダヤ人の追放を強く求め、その主たる理由としたのが空襲の結果としての住居不足であった。ドイツ占領下のヨーロッパ諸地域でも軍や行政責任者がユダヤ人から可及的速やかに解放されることを迫った。東部占領地域相アルフレート・ローゼンベルクは、ヴォルガ・ドイツ人に対するスターリンの報復措置をさまたげるために、ユダヤ人強制追放をスターリンに対する圧力手段として投入すべきだと要求した (VEJ 6:17)。

【フランスの抵抗運動とユダヤ人追放圧力】

ドイツのソ連攻撃開始後、41年夏、フランスの共産主義者はドイツ占領権力者に対する抵抗を強化し、ドイツ軍に対するいくつもの暗殺を敢行した。8月21日、パリでドイツ兵士に対する最初の暗殺が決行された。これが抵抗運動側からの一連の武力闘争の第一歩となった。それはドイツ側からの報復措置を過激化させた。ドイツ当局は暗殺の翌日、まずはドイツ軍占領区域のフランスでドイツ諸機関によってないしはドイツ諸機関のために拘留されている全フランス人をまとめて捕虜とすると宣言した。9月3日にさらにもう一件の暗殺事件が発生したとき、ドイツ軍司令官は報復措置として3人の捕虜の射殺を命じた。しかし、この措置について、ヒトラーは厳しく「全く不十分な反応」だと断じた。この情勢下、パリ駐在ドイツ大使オットー・アベツは親衛隊ライヒ（全国）指導者ヒムラーに9月半ば、フランスと占領諸国からユダヤ人を東方地域に追放する提案を提出した。それを促す事件が起きた。10月20日、ナントの軍司令官が、翌日、ボルドーの戦時行政管理委員が射殺された。ヒトラーはそれぞれに50人ずつ捕虜を射殺せよと命じた。10月22日と24日、98名の捕虜が実際に処刑された。これはフランスでも米英などでも驚愕を引き起こした。アメリカ大統領ローズヴェルトは「無実の捕虜の処刑」を厳しく非難する声明（ニューヨーク・タイムズ10月26日）を発表し、「テロルによって人間の抵抗精神を打ち砕くことは不可能だ」と。これにチャーチルも賛同の意を表明した (VEJ 5/288)。

大量の捕虜射殺を強要するベルリン首脳部に対し、フランス内外の反感・嫌悪の広がり直面にフランス占領軍司令官は、フランス当局の対独協力（コラボラシオン）姿勢に悪影響が出ることを恐れた。そこで、レジスタンスへの報復として、「ユダヤ人捕虜をフランス人共産主義者と一緒に」強制移送することになった。さらに、アベツはフランスに住むすべてのユダヤ人の強制追放を目標にした（VEJ 5: 59）。41年10～11月のドイツ、プロテクトラート、ルクセンブルクからのユダヤ人強制移送の開始とおなじころ、ヴィシー政府は内務省の指揮命令下にユダヤ人問題特別警察を設置した。この機関はドイツ治安警察の直接的指示の下、フランスの非占領南部地域でユダヤ人の掌握と迫害にも参加した（VEJ 6: 17-18）。

【セルビアの抵抗と対抗的ユダヤ人追放要求】

セルビアでも抵抗運動に対する征圧作戦はフランスにおけるのと同様であった。ドイツ占領当局は「東方への」ユダヤ人追放を、フランスのドイツ占領軍当局と同じく暗殺犯・抵抗運動に対する「贖罪措置」として要求した。ベオグラードのドイツ公使館はまずもって8000人の「ユダヤ人扇動者を厄介払いしたい」とした。だが、「東方への」強制移送が困難に直面し、移送決定を待てずにいた間に当地の国防軍部隊が男子ユダヤ人を大量に射殺しはじめた。その中には約1100人のドイツ、オーストリア、チェコのユダヤ人が含まれていた。彼らはパレスチナへの途上ユーゴスラヴィア・ドナウ川のクラドヴォ港に滞留していたのである。それによってはじめてドイツ・ユダヤ人がドイツ部隊に射殺された（VEJ 6: 18）。

41年10月18日、アイヒマンのユダヤ人移送課の部下フリードリヒ・ゾーアが外務省ユダヤ人課のフランツ・ラーデマッハーとベルグラードで会い、「ユダヤ人・ジプシー問題の解決」の困難について検討した。彼らは占領行政当局にセルビア・ユダヤ人の強制移送が近々にはできないことを伝えた。男子ユダヤ人の射殺執行もまだ残っていたが、彼らの婦女子・老人2万人と1500人のジプシーは、「ユダヤ人問題の全体的解決の枠組みで東方

の一時収容所に追放されるまで」、隔離しておく必要があるとした (VEJ 6: 18)。だが、どこに、どのように、どのような条件で、いつまで、これが占領当局の大問題。ヨーロッパの東西南北、電撃的に「成功」した広大な占領地で、いまや累積した難問が突き付けられた。それはユダヤ人に対する政策の過酷化の正当化理由とされた。

【スロヴァキア、クロアチア】

対ソ戦争はナチス・ドイツの権力領域の周辺地域でもユダヤ人に対する措置を先鋭化した。そこには周辺諸国に派遣された「ユダヤ人問題顧問 (Judenberater)」の働きかけがあった。スロヴァキアも自国軍隊を対ソ戦に投じていた。ユダヤ人や彼らの住宅の標識を導入し、移動の自由を制限し、1941年9月にはいわゆるユダヤ人法典でそれだけでなくもすでに差別され、広範に所有剥奪されていたユダヤ人マイノリティに対する人種主義的差別措置の法体系を制定した (VEJ 13/38)。アイヒマンの提案に基づいて親衛隊大尉ヴィスリツェニーが40年7月以降、いわゆる「ユダヤ人問題顧問」としてブラティスラヴァ (プレスブルク) で活動した。ここで彼はドイツ公使館と密接に協力し、反ユダヤ主義政策に関係のあるすべての省に影響力を行使した。彼は^{ライヒ}帝国保安本部から直接派遣された最初の「ユダヤ人問題顧問」であった。ほかの国ではほとんど外務省の役人がこの機能を担った (VEJ 6:24)。41年10月20日、ヒムラーがスロヴァキア国家指導部に、ユダヤ人をポーランドに追放するドイツの計画を説明し、この機会にスロヴァキアのユダヤ人についても言及した。41年12月はじめ、プレスブルクのドイツ公使ハンス・ルーディンは、スロヴァキア政府が、ドイツに住むスロヴァキア・ユダヤ人がドイツ・ユダヤ人と同じように取り扱われるならば、すなわち、占領下ポーランドのゲットーに追放されるのであれば、この措置に同意するであろうと伝えた。スロヴァキア政府はただこれらユダヤ人の財産だけは要求した (VEJ 6/153)。

「独立国家クロアチア」ではファシストのウスタシャ政府が1941年4月

の国家創設以来、同盟国ドイツの支援を得てセルビア人、ユダヤ人、ロマ（ジプシー）に対してとりわけ残忍な態度をとっていた。ソ連への奇襲攻撃が始まると、クロアチアでも暗殺やサボタージュが増え、共産主義者の蜂起運動が国の広い範囲を支配下に置いた。体制の報復作戦はとりわけユダヤ人に厳しかった。全家族が強制収容所に拘留された（VEJ 6:25）。

1941年7月22日、総統大本營で外務大臣ヨアヒム・フォン・リッペントロープ、国防軍最高司令部長官カイテルが同席している会談において、ヒトラーはクロアチア防衛大臣スラヴコ・クヴァテルニクに向かって、ユダヤ人をヨーロッパから遠ざける彼の決意を保証した。会談の記録によれば、ヒトラーは、「ある国家が何らかの理由でユダヤ人家族を我慢したら、この家族は新しい破壊のバチルスの病巣となる。ヨーロッパからユダヤ人が一人も居なくなれば、ヨーロッパ諸国の統一はもはや脅かされることはない。ユダヤ人をどこに追放するか、シベリアかマダガスカルか、そんなことはどちらでもいいことだ」と述べた（VEJ 14/100）。

ユダヤ人は国民に属しているとはみなされず、国外移住を迫られた。ユダヤ人はニュルンベルグ法を手本とした諸差別（ユダヤ人規定、混血規定などVEJ 14/113, 88, 89）の下に置かれた。彼らはラディカルに遂行された「アーリア化」キャンペーンで財産の大部分を失った。1941年9月から新設の、すぐに悪名高くなった収容所に、特にユダヤ人が拘置された。年末にはすでにクロアチア・ユダヤ人の3分の2が強制収容所に強制移送された（VEJ 6:25）。

【ルーマニア】

ルーマニアもソ連攻撃に加わり、独ソ不可侵条約下の1940年にソ連に割譲されたベッサラビアと北ブコヴィナを再征服した。それだけではなく、それよりも東のトランスニストリアをドイツの承認のもと大オデッサ地域も含めて占領して手に入れた。ルーマニア軍部隊が41年に占領した地域には、戦前には32万人のユダヤ人が住んでいた。そのうちの14万人は赤軍と

いっしょに逃げ去ることができた。しかし、すでに41年8月、アインザッツグループDはルーマニア占領軍が到着した際に何千人かユダヤ人を殺害していた。ルーマニアがトランスニストリアを手に入れた後の数か月間に、ルーマニアはほとんど独自にユダヤ人に対する殺害を継続した (VEJ 7: 66)。

ルーマニア当局は自ら占領した地域にベッサラビアやブコヴィナからユダヤ人を強制追放した。しかし、ウクライナの新しい国境の東で作戦中のドイツ軍部隊は、このユダヤ人をルーマニアに追い返した。これにはルーマニア国家元首イアン・アントネスクが抗議した。追放の際にすでに約6万人が死亡した。それよりはるかに多くのものが、それに続く数か月のうちに戦慄すべき諸条件のもと、トランスニストリアのゲッターや収容所での飢餓や強制労働の結果、死亡した (VEJ 7: 66)。トランスニストリアにおける最初の大量殺害は、41年10月16日のオデッサ占領直後にルーマニア軍司令部で起きた爆弾テロ——ソ連の秘密情報機関が仕掛けておいた爆弾によるもの——への報復措置であった。ルーマニア軍参謀部の全員と若干のドイツ人将校が死亡した。アントネスクは、10月23日、犠牲になったルーマニア人兵士一人当たり200人、負傷者一人当たり100人のユダヤ人の射殺を命じた。さらに翌日、この都市に難民として滞在している全ベッサラビア・ユダヤ人の殺害を命じた (VEJ 7/299, 300)。大量殺害は三日間にわたって町のいくつかの場所で行われた。総数で少なくとも25000人のユダヤ人が、絞首刑に処され、射殺され、あるいは路面電車車庫で焼き捨てられた (VEJ 7: 66; VEJ 7/304, 306, 311; VEJ 13: 63)。9月末にドイツ軍占領直後のキエフで起きたドイツ軍火薬庫爆発、市内大火、その報復措置としてのバビ・ヤール溪谷での3万人余のユダヤ人殺戮 (永岑 2001, 90-92, 120, VEJ 7/84, 90, 94, 155, VEJ 8/275) と同じことが、オデッサでも発生したのである。

1941年11月、ルーマニア当局はユダヤ人をオデッサからトランスニストリアの三つの大きな収容所 (それぞれ4万人、18000人、8000人) に連行した (VEJ 7/309)。これらの収容所も臨時的なもので、粗末な小屋や豚小

屋から成っていた。伝染病と飢餓が勃発した（VEJ 7/310）。12月16日の閣議でトランスニストリア総督は8万人以上のユダヤ人に広がるチフスについて警告し、彼らを消毒しないと他の全員に感染すると訴えた。アントネスクは、「死なせればいい」と。12月21日、ルーマニア当局は囚人を殺害し始めた。これには民族ドイツ人自警団とウクライナ補助警察が参加した（VEJ 7:67）。

オデッサには1941年11月の強制移送の後もすくなくとも21000人のユダヤ人が残っていた。彼らは「ルーマニア人に対するこれ以上の暗殺を回避し、平穏な状態を求める住民の利益のために」、42年1月10日から郊外のゲットーに閉じ込めることになった。それはもちろんその後の強制追放の準備であった（VEJ 7/305）。移送は早くも1月12日に始まった。移送中、多数が凍死した。生存者は主として100キロ離れた駅で降ろされた。ドイツ人が住む地域の真ん中で、そこには宿泊場所も食料もまったくなかった。ルーマニア人警察がユダヤ人を村の方向に連行し、民族ドイツ人自警団が野原で射殺した。殺戮は初夏まで続いた。ルーマニア当局は、オデッサと南トランスニストリアから全部で約3万人を強制移送し、そのうち約28000人は生き延びられなかった（VEJ 7/320, 321）。殺害されたものの衣服とユダヤ人の住居はその地のドイツ人に分配された（VEJ 7/326）。

2. ドイツ・ユダヤ人「東方」移送の諸局面——1941年10月～42年2月

【ユダヤ人東方追放の諸局面】

ドイツからのユダヤ人強制移送は、いくつかの局面に分かれていた。すでに見たように第一局面は、1941年10月から11月はじめであり、リッツマンシュタットへの移送であった。しかし、これもすでに言及したように難問にぶつかり、最初の計画通りには進まず、第一局面のすぐ後の第二局面として42年2月まで、移送列車はミンスク、カウナス、リガに向けられた。42年3月から、第三局面がはじまった。この局面では、ドイツ、ルクセン

ブルクとプロテクトラートのユダヤ人が総督府に連行された。第四局面は42年6月からで、移送はテレージエンシュタットに向かった。最後の局面として、42年11月からドイツのユダヤ人を乗せた若干の列車が直接アウシュヴィッツとほかの絶滅収容所に向かった（VEJ 6:37）。

【追放の第一局面】

1941年10月中ごろから11月4日までの3週間足らずのあいだにおよそ2万人がリッツマンシュタット・ゲッターに強制移送された。そのうち9000人以上がいわゆる旧ドイツ（1937年までの領土）から、ウィーンとプラハからそれぞれ5000人、ルクセンブルクから326人。最初のうち彼らは生きた証を故郷に送ることができた。ゲッターの彼らに手紙や小荷物を送る可能性もあった（VEJ 6:37）。

しかし、故郷の財産は没収された。11月4日付の「ユダヤ人追放」に関する大蔵省の通達はゲシュタポが追放ユダヤ人の財産の保全にあたることなど、詳細な規定を各地の担当官に知らせている（VEJ 6/31）。

【戦況・全占領地の窮状・ドイツ本国民衆の不安・クーデタ計画】

外交官ウルリッヒ・フォン・ハッセル¹³は11月1日の日記に、ベルリン

¹³ Ulrich von Hassel (1881-1944). 法律家。1909 外務省に、1919-21 ローマ大使館参事官、1921-26 バルセロナ総領事、公使1926-30 コペンハーゲン、1930-32 ベオグラード、1932-38 ローマ。1938年2月、召還。1943 退官。1943/44 経済研究所。1944年7月20日暗殺事件共謀者として死刑判決、処刑（VEJ 6:165）。ハッセルのこの日の日記には、7月20日事件にかかわってくるような重要人物が多数偽名で書き込まれている。軍人では、エルヴィン・フォン・ヴィッツレーベン（偽名シェルツ）、職業将校、ポーランド・フランス出兵で司令官、1940陸軍集団D最高司令官、1941年西部最高司令官、1942更迭。7月20日事件共謀者として逮捕され、死刑判決、処刑。ゲオルク・トーマス（偽名アウアリー）、職業将校、戦争省防衛局防衛経済参謀長、1939-42 国防軍最高司令部防衛経済・軍備局長。1941/42 ライヒスヴェルケ・ヘルマン・ゲーリング監査役。7月20日事件連座の疑いで逮捕（VEJ 6:166）。

からのユダヤ人追放の背景にある戦況、追放に対する市民の反応を記している。

①人々は、モスクワ攻撃開始直後の2週間ほどの勝利でドイツ軍が10月半ばモスクワまで約100キロと迫ったとき、モスクワ占領は間もなくだと期待を膨らませた。しかし、その後半月の間に、劣悪な天候に支えられたロシアの抵抗力の前に失望が前面に出てきた。ある程度の慰めは南方（石油に向かって）における進軍の継続であった。②だが、全軍の過剰緊張と多数の分野における供給困難に不安は増大している。③全占領地域で耐え難い状況がさらに深刻化しているとの認識がますます強化されている。④東部におけるユダヤ人や捕虜に対する、またベルリンやその他の大都市における無害で声望あるユダヤ人に対する恥知らずな諸措置にすべてのきちんとした市民は吐き気を催している。最後に⑤軍指導部ではこうした全卑劣行為をものはや共にしたくないという「構想」が次第に強まっている、と（VEJ 6/29）。

ハッセルが以上のような認識を打ち固めるにあたっては、同志（偽名ガイスラー、本名ポーピッツ¹⁴）との議論の積み重ねがあった。偽名ノルトマン（本名イエッセン¹⁵）と数回、それに偽名フォルスター¹⁶と偽名プファ

¹⁴ Dr. Johannes Popitz (1884-1945). 法律家。1924からプロイセン内務省、1919-29 プロイセン大蔵省、1925-29 次官、1933-44 プロイセン大蔵大臣。1937 ナチ党入党。1937 辞職申請（ユダヤ人迫害に抗議）。1944年7月20日事件共謀者との判決、処刑（VEJ 6: 166）。

¹⁵ Dr. Jens Peter Jessen (1895-1944). 経済学者、ゲッティンゲン大学、キール大学、マールブルク大学の教授。1930 ナチ党入党。1935からベルリン大学正教授。1941 陸軍経理総監エドゥアーツ・ヴァーグナー参謀。1944年7月20日暗殺事件に関連して死刑判決、処刑（VEJ 6: 166）。

¹⁶ ルートヴィヒ・ベック将軍かフランツ・ハルダー将軍と思われる（VEJ 6: 166）。

フ(本名ゲルデラー¹⁷)とは一回ずつ会って議論。クーデタ計画も練っている。実際の決起が遅れに遅れて1944年7月20日になったとしても、その萌芽がすでに41年10月から11月にあったということは、ユダヤ人追放政策の背景を考えるうえで重要であろう。ドイツ民衆の十一月革命の再現こそは、「1918年シンドローム」のヒトラー・ナチスが最も恐れ、忌み嫌ったことだからである。そして、この情勢こそが、臨時的措置としてのユダヤ人追放政策を規定する重要な契機の一つだったとみるべきであろう。

【追放の第二局面】

1941年11月8日から28日の間に7000人がハンブルク、ブレーメン、デュッセルドルフ、フランクフルト、ベルリン、ブリュンとウィーンから白ロシア(ベラルーシ)のミンスクに追放された。11月にデュッセルドルフから移送列車を警護した治安警察大尉は、移送列車、ミンスク・ゲッター、そしてミンスクのソ連戦時捕虜について冷笑的で吐き気を催すような報告書をまとめた。彼は、ユダヤ人や飢餓状態のソ連戦時捕虜が置かれた極限状態(VEJ 6/60, 80)で見せる「野蛮性と道徳的崩壊」を描いている。彼は、明るみに出た人肉食をソ連の野蛮性の象徴だとする一方で、ラトヴィア警察が8000人のユダヤ人を射殺した際に「規律の良い正当な暴力」と見て称賛した(VEJ 6/42)。

【1941年11月16日ゲッベルス演説】

ハッセルの日記とクーデタ構想の萌芽が暗示しているように、独ソ戦の厳しい状況は市民の怒りや不安を膨らませた。それに対抗する手段、ガス

¹⁷ Dr. Carl Friedrich Goerdeler (1884-1945). 法律家で政治家。1920からケーニヒスベルク第二市長。1931までドイツ国家人民党(DNVP) 党員。1930-37 ライプツィヒ市長、1934から同時に価格形成・価格監視ライヒスコミッサール、1937 市長退職、その後ボッシュ株式会社顧問。1944年7月20日の暗殺計画連座(ヒトラー失脚後の首相予定者として)、死刑判決を受け処刑(VEJ 6:166)。

抜きの方策が求められた。ユダヤ人追放の理由付けが、その役割を担った。ドイツからのユダヤ人追放が人目に付き社会的関心と呼ぶ状況下、ベルリンからのユダヤ人追放を始めるまさにその前日、宣伝相ゲッベルスは追放正当化のための有名な演説「ユダヤ人に責任あり」を行った（VEJ 6/37）。

彼によれば、「今次戦争の勃発と拡大に対する世界ユダヤ人の歴史的責任」には、十分な証拠があった。ユダヤ人が「彼らの戦争」を欲したのだ。だが、彼らには総統が1939年1月30日の国会演説で表明したこと、すなわち、「国際金融ユダヤ民族が諸国民をもう一度世界戦争に引きずり込んだならば、その結果は地球のボルシェヴィズム化、それ故ユダヤ民族の勝利ではなく、ヨーロッパのユダヤ民族の絶滅だ」との予言が真実であることが明らかになっている、と（VEJ 2/248）。一般にこの演説は、ヒトラーが「ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅で脅かした」もの、予言したものとする。しかし、それは第二次世界大戦後、あるいは、1942年から43年以降の実際のユダヤ人の大量殺害を知ったうえでの特徴づけである。この演説の眼目は、世界戦争の責任を問題にしている。そこが一番重要ではないか。その責任を国際金融ユダヤ民族にありとすることにあつた。また、第一次世界大戦でボリシェヴィキ革命が成功したことを、ユダヤ人（民族）の責任に帰すことが眼目であった。

第一次世界大戦の帰結としてのヴェルサイユ条約は、日本を含む連合国（米英仏等）が戦争をドイツの単独責任に帰し、その必然的結果としてドイツからの植民地剥奪、領土削減、ドイツへの莫大な賠償金を正当化した。そこではドイツと覇権を争った連合国の帝国主義と植民地主義の責任が免罪される論理となっている。ヒトラーの論理は、次の世界戦争が起きた場合、ユダヤ民族とボリシェヴィズムに責任を帰すことにある。彼の論理は、第一次世界大戦の勝利諸国の帝国主義・植民地主義と同じ論理で、ソ連・その周辺諸国の征服と東方大帝國建設を正当化する論理であった。このヒトラーの中心的論理を見失うと、歴史理解がゆがむのではないか。ヒトラー、ゲッベルス、ナチ党指導部、それに追隨する勢力の追求しているこの根本

目標が、1941年11月、ソ連の反撃、独ソ戦の泥沼化と大西洋憲章以来の英米等の反ドイツ戦闘力の前に危機を迎えつつあるということ、その本当の敵勢力との対決を暗黙のうちに隠蔽し、ユダヤ民族に責任を還元して見せること、このレトリック、その対抗関係の示し方を直視しておく必要がある。つまり、ユダヤ人問題は、ヒトラー・ナチズムにおいて世界戦争の論理と力学のなかに位置づけられていることが、ユダヤ人問題の展開・推移をみるうえで重要だというのが本論の見地である。

ゲッベルスは1941年11月16日の演説で続ける。「われわれはまさにこの予言の執行を経験している」。過酷だが、哀れみやましてや同情はまったく不適當だ。世界ユダヤ民族がこの戦争を引き起こしたが、自らが活用できる勢力をまったく誤って評価し、今や漸次的絶滅過程の責め苦を被っているのだ。今や「目には目を、歯には歯を」のユダヤの法則に従って破滅しているのだ、と。そして、「この歴史的対決においては、すべてのユダヤ人が敵だ。ポーランドのゲットーでその日暮らしをしようが、ベルリンやハンブルクでまだ寄生虫の生活をやっと維持しているにしろ、またはニューヨークやワシントンで戦争トランペットを吹いていようが、どうでもいいことだ。全ユダヤ人が、生まれと人種に基づいて国民社会主義ドイツに対する陰謀の一員なのだ。彼らは没落と絶滅を望んでおり、それを手伝うために自分でできることをやっているのだ」と。ゲッベルスがヒトラーの許可を得て1941年8月に導入した黄色の星はすべてのユダヤ人を「可視化するためだ」った。ドイツ民族共同体に対する「犯罪の最も小さな試みでもわかるようにするため」だった (VEJ 6/37)。

【ヒトラーの大ムフティへの約束】

ヒトラー・ナチズムの反ユダヤ主義は、アラブ世界の反ユダヤ主義と重なり合う部分があった。1941年11月28日、彼はエルサレムの大ムフティ¹⁸

¹⁸ Großmufti (イスラム法律学者)。

と会談した際、アラブ世界の側に立った発言をした。大ムフティは「全アラブ世界によって称賛されている大ドイツ帝国総統に、常にアラブ世界、特にパレスチナ問題で示された共感への感謝を表明」した。アラブ諸国は、ドイツが勝利すること、そしてそれがアラブ問題に貢献することを確信している、と。アラブ人は「ドイツの必然の友」だという。なぜなら、アラブ人はドイツと同じ敵、すなわちイギリス人、ユダヤ人とコミュニストを持っているからだ、と (VEJ 6/46)。

ヒトラーは賛辞と連帯の挨拶に対して、アラブ問題に対するドイツの根本的態度はムフティ自身が述べたように明確だとした。ドイツは「ユダヤ人に対する非妥協的闘い」を支持している。それにはもちろん「パレスチナにおけるユダヤ人の故郷に対する闘争」も含まれている。現在、ドイツは「ユダヤ民族の二つの権力的地位、すなわち大英帝国とソヴィエト・ロシアとの生か死かの闘いの最中」にある。理論的には資本主義のイギリスと共産主義のソヴィエト・ロシアは互いに違っている。しかし、実際には、ユダヤ民族は両方の国で共通の目標を追求している。この戦いは政治的にはドイツとイギリスの闘いであり、世界観的にはナチズムとユダヤ民族の闘いである。ユダヤ民族は自分の目的のためにイギリスの権力手段を使っていると (VEJ 6/46)。

ヒトラーは、ドイツが北コーカサス地域¹⁹への通路を切り開くため「非常に厳しい戦い」の最中にあり、諸困難は何よりも補給にあることを認めた。鉄道・道路の破壊および冬の始まりのため、補給が異常に困難だ。だが、ユダヤ・共産主義のヨーロッパ帝国の完全な破壊まで戦いを続け、そう遠くない時期にコーカサスへの入り口にドイツ軍が到達するであろう。そうすれば、アラブ世界に解放の 때가やってくると (VEJ 6/46)。

以上のように、ヒトラーはユダヤ民族との闘いを英ソとの「生か死」をめぐる死闘の文脈に位置づけていることを確認しておく必要がある。ヒト

¹⁹ コーカサスまで逃げ延びたユダヤ人も、ドイツ占領下で射殺された (ゴルバチョフ2022, 36-37)。

ラー・ゲッベルス等のユダヤ人殺戮のベクトルは、この死闘の帰趨に関わってくる。ナチス・ドイツの苦境と敗退がユダヤ人殺戮のベクトルを決定する。

【第二局面——続き】

1941年11月17日から25日の間に総数約5000人を乗せた5本の列車がドイツからカウナスに向かった。最初はリガが目的地と予定されていた²⁰。しかし、ゲシュタポの指示で直前に行先が変更された。彼らはベルリン、ミュンヘン、フランクフルト・アム・マイン、ウィーン、ブレスラウ出身のユダヤ人であった。これら諸都市の中でも最も東部に位置するブレスラウさえも、16日には空襲で10人の死者が出た。ブレスラウの歴史家コーン (Willy Cohn) ——妻と二人の娘とともに移送され射殺される——は、こうした情勢を解釈して15日の日記に記した。「U. S. A. が今や中立法を変更した。…根本においてアメリカとの戦争だ」。ドイツの最終的運命だけが問題となるのではなく、「全地球の存在か無かをめぐる闘い」になった。だが、「われわれは全く無力だ」と (VEJ 6/38)。コーンたちを含め、リガに移送されたユダヤ人は現地のゲッターに連行されず、要塞IXで11月25日と29日に射殺された。5日後、ヒムラーはドイツからの連行者の射殺を禁止した (VEJ 6:38)。

1941年11月27日からドイツからの移送列車は実際にリガに向かった。最

²⁰ 1941年10月28日、ドイツ市町村連絡協議会 (Deutscher Gemeindetag) の事務総長が内務省の極秘情報としてミュンヘン市長に伝えたところでは、下記のようなようであった。①ユダヤ人混血児と (暫定的に) 混血婚は追放除外。②70歳以上と病気のユダヤ人は追放除外。③25000人をミンスクへ、25000人をリガへ、20000人のユダヤ人と5000人のユダヤ人をリッツマンシュタットへ追放。リッツマンシュタットへの追放は既に進行中。ミンスクへの追放は11月4日、リガへは11月13日。12月4日に75000人のユダヤ人の追放を完遂するものとする、と (VEJ 6/22)。総督府が受け入れ不可能状態、総督フランクの受け入れ拒否の度重なる訴えが、この限りで有効であったことがわかる。逆にそれが、ヴェンゼー会議において最終解決を総督府から始めてほしいという訴えと重なる (アーレント 2017, 158-159)。

初の、到着直後に射殺されたユダヤ人についてはベルリンにまったく情報が入ってこないという事実が、当地に残された家族親類を不安にした。「殺されたんだ」という噂がすぐに広まった。6週間後の42年1月13日、ドレスデンのヴィクトール・クレンペラーはいくつもの筋から「リガに連行されたものは、列車から降りると順番に射殺された」という噂を日記に書き留めている。他方で、犯人たちは、ユダヤ人の「東部」における労働配置というフィクションを維持したままであった。そこで、彼らは、被追放者にオープン、ミシンその他の作業道具類を持参するように要求した。だが、概して到着地で被追放者がそうした道具類をみることはなかった（VEJ 6:38）。

最初のリガへのベルリン発移送列車に続き、1941年11月と12月にニュルンベルク、シュトゥットガルト、ウィーン、ハンブルクからやって来た4列車のユダヤ人は、さしあたりリガ郊外の大農場ユングフェルンホーフに極めて粗末な諸条件のもと宿泊した。彼らの5人に一人が冬を生き延びることはなかった。収容所の監視人がしばしばユダヤ人をバラックから引き出し、射殺した。毎日たくさんのユダヤ人が死に、担架で運び出され、墓穴にまとめて埋められた。射殺されたものと一緒に一週間半で200人のユダヤ人がそこに埋葬された（VEJ 6:39）。

暫定的な輸送停止が始まる12月15日までに、なお9列車がリガに到着した。その一つの監視員だった治安警察大尉は、「一貨車60～65人」の過剰積載、途中で自殺を試みたユダヤ人について報告し、リガでは人口約36万人中ユダヤ人約35000人が有刺鉄線で囲まれたゲットーに入れられ、目下男子2500人だけが労働配置され、その他のユダヤ人は「他の合目的用途に投入されるか、ラトヴィア人によって射殺された」などと淡々と書き、反ユダヤ主義の思考・認識パターンに基づき彼らの行為の有用性と必要性を述べている（VEJ 6/59）。

1942年1月9日から2月10日まで10本の移送列車がリガに送られた。その一本はプロテクトラートからであった。その後は、42年8月18日から10

月26日の間に5本の移送列車がリガに向かった。総数約23650人のドイツ、オーストリア、チェコのユダヤ人が追放され、そのほとんどは到着後数か月間に殺害された（VEJ 6:39）。

3. 独ソ戦から世界大戦への展開とヴァンゼー会議²¹

1941年11月29日、ユダヤ人の東方への移送開始の6週間後、ハイドリヒは最重要中央諸官庁および親衛隊の代表者（次官クラス）に12月9日ベルリンで開催する会議の招待状を出した（VEJ 6/47）。会議の目的は「ヨーロッパのユダヤ人問題の全体的解決」の準備のために全参加中央諸官庁の調整を行うことであった。会議招集の権限はゲーリングから7月31日付の文書（VEJ 3/196）で手に入れていた²²。だが、12月7日のアメリカ艦隊基地パール・ハーバーへの日本の攻撃のため、それに対応したドイツのUSAへの宣戦布告準備のため、参加予定者に急遽電話で延期が告げられた。外務省は当初予定日の前日12月8日には、省としての「要望と構想」を省内ユダヤ人問題課（課長ラーデマツハー）がまとめ、会議参加ルター次官補に提出していた（VEJ 6/52）。第一に、ドイツに定住のドイツ国籍の全ユダヤ人を、クロアチア、スロヴァキア、ルーマニアのユダヤ人も含め、東方に追放。第二に、旧ドイツ国籍で、ドイツが占領している地域に生活し、ライヒ市民法の最新指令（1941年11月25日付）で無国籍となった全ユダヤ人の追放。第三にセルビアの全ユダヤ人。第四に、ハンガリー政府によりドイツに引き渡されたユダヤ人の追放。第五に、ルーマニア、スロヴァキア、クロアチア、ブルガリア、ハンガリーの政府がこれらの諸国に住んでいるユダヤ

21 詳しくは、ヴァンゼー会議記念館（編著）[2015]を参照されたい。

22 ヒトラー「絶滅命令」、あるいはヨーロッパ・ユダヤ人の大々の絶滅政策の画期をこの1941年7月31日の文書に求める説と実際の中央諸官庁調整会議（ヴァンゼー会議）の開催が当初12月9日になったこと、しかし、急遽42年1月20日に延期されたことを重視し、この半年間に起きた諸事実に重きを置く説とが、ホロコーストをめぐる学界論争の論点の一つであった。

人を東方へ追放することに進んで同意する声明。第六に、ブルガリア、ハンガリーの政府に対し、ニュルンベルク法を模範にしたユダヤ人法を導入するよう影響力を行使。第七に、ヨーロッパのそのほかの諸政府に対してもユダヤ人法の導入を働きかける。第七に、こうした諸措置をこれまで同様、秘密国家警察と合意の上で遂行すること。

以上から外務省の見地は、関係ヨーロッパ諸国のユダヤ人の「東方への追放」という希望・構想であり、追放されたユダヤ人の運命には関心がなかったことがわかる。

1941年12月12日、ヒトラーは大管区指導者たちに演説をした。その内容をゲッベルスが13日の日記に書き留めた。ヒトラーは、東部戦線のものさつもさちもいかない状況を「不可抗力の運命」だと認めつつも、総じてまったく楽観的に「来年にはソヴィエト・ロシアを少なくともウラルまで完膚なきまでにやっつける」と断じた。さらに彼は「非常に大規模で委曲を尽くした社会プログラム」を開陳した。労働者と農民がその果実を享受することになる、その基礎を作り出すのは戦時捕虜の労働だ、と。ヒトラーは反ユダヤ主義にも「簡単に」言及した。「ユダヤ人問題に関してはきれいさっぱり一掃する」と。数日前のアメリカ参戦に鑑みて、ヒトラーはもう一度、「世界戦争の場合にはユダヤ人を絶滅だ」と予言したことを思い出させた。そして、今や世界戦争だ、ユダヤ人の絶滅は「必然の結果だ」と（VEJ 6: 41）。

ヒトラーのこうした言説は、福音主義教会の代表者たちにも浸透した。1941年12月17日の「福音主義ユダヤ人の教会での地位」に関する告示は、「国民社会主義ドイツ指導部が多数のドキュメントで反論の余地なく証明したように、この戦争はユダヤ人によって世界的規模で引き起こされたもの」だとした。その帰結として、キリスト教の洗礼を受けたユダヤ人を教会から排除すると通達した。洗礼を受けたからと言って、ユダヤ人の人種的特殊性、その民族所属性、その生物学的存在は何も変わらないから、と（VEJ 6/54）。

対米宣戦布告の数日後、1941年12月18日、ゲッベルスはヒトラーと総統大本営で会談した。二日前の16日、モスクワ攻撃失敗で陸軍最高司令部・中央軍集団の将軍たちとヒトラーは深刻な議論をし、撤退禁止・戦線死守を命じた。自ら陸軍最高司令官となる決断をして、かえって精神的に高揚していたのか、負担の重さのそぶりも見せず、ゲッベルスにはヒトラーが「新鮮で輝いて見えた」。ヒトラーは、極東の軍事的展開——マレーシア東海岸で日本空軍が二隻の英戦艦を撃沈した——を「非常に喜んでいた」(VEJ 6/55)。

ヒトラーはこの機会に改めて、ユダヤ人に対し「断固として」、「市民的感傷性なしに」厳しい措置を執るとゲッベルスに保証した。ユダヤ人はとくにドイツから追い出さなければならない。特にベルリンを可及的速やかにきれいにする可能性を相談した。ベルリンでは約13000人のユダヤ人が戦時産業に従事しているので四ヵ年計画と経済省から異論が出ると予想された。だが、「ボルシェヴィキの戦時捕虜で置き換えることができる」と見た。いずれにしろ、ユダヤ人がまだ帝国首都に生きて住んでいる限り、「絶対に統合されたとはみなせない」からであった。ドイツのインテリやドイツ社会は「まったく本能を欠如」している。ユダヤ人問題を解決しておかないと、「われわれの死後、最も壊滅的な諸結果」が引き起こされる。ユダヤ人は「すべて東方へ追放することになる」。彼らにそこで何が起きるか、われわれには関心がない。この運命はユダヤ人が望んだことだ。彼らはだから戦争を始めたのだ。だから、彼らは今しりぬぐいをしなければならないのだ、と。ヒトラーは、この問題を「最終的に必要な苛酷さで解決できる状態」にあった(VEJ 6/55)。ユダヤ人が追放された東方で過酷な運命にさらされることは、この文脈で必然的に想定されていた。

ヴァンゼー会議でハイドリヒが確認した基本的方針は、まさにこの「東方への追放」であった。1933年のナチス権力掌握から進めた「ドイツ民族の個々の生活領域」からのユダヤ人追放、さらに外国移住による追放、す

なわち「ドイツ民族の生存圏」からのユダヤ人の追放を、41年9月に「来年春まで」の臨時的措置として開始した「東方への追放」を踏まえ、戦時下の情勢に合わせて修正した。すなわち、41年10月末をもって親衛隊ライヒ指導者・ドイツ警察長官ヒムラーは、「戦時中の外国移住の危険に鑑み」、ユダヤ人の外国移住を禁止した。残るは、「東方への追放」、あるいは「東方への疎開」だけであった。すなわち、「総統のしかるべき事前承認を踏まえたユダヤ人の東方への疎開」(ヴァンゼー会議記念館(編著) 2015, 146-147)が、臨時の措置ではなく原則となった転換点はここにあった。何か月も外国移住のために必要書類などを準備していたユダヤ人には、その努力が突然水泡に帰した(VEJ 6/41)。追放したユダヤ人は無国籍とされ、その財産はドイツ国家に属するものとされた(VEJ 6/43)。

1941年9月に臨時的移送政策を始めたときにはまだ42年春までに戦争を勝利のうちに収めるという楽観がヒトラー、ヒムラー、ハイドリヒの発想の前提にあった。「臨時措置」の意味合いはその楽観を反映していた。それが10月から11月の戦況、モスクワ攻撃失敗の明確化で厳しくなった。ハイドリヒがゲーリング署名の命令(1941年7月31日)(VEJ 3/196)²³を獲得して開始しようとし、一旦はヒトラーによって止められた中央諸官庁の全ヨーロッパ的ユダヤ人問題解決のための全体的調整・準備会議(すなわちヴァンゼー会議)を開催する情勢が熟してきた。ハイドリヒが41年11月29日付で「ヨーロッパのユダヤ人問題の全体的解決」を検討する会議(12月9日開催)を招集し、関係各省庁の要望を提出するように求めた(VEJ 6/47)のは、それを示していた。ただ、開催直前、日本の真珠湾攻撃・アジア太平洋戦争への突入とそれに呼応したヒトラーの対米宣戦布告は、世界情勢の根本的転換を明確化した。42年1月1日の26か国連合国宣言はその対決軸の確定であった。これを受けて、12月9日直前に延期となった会議を「も

²³ 戦後証言によれば、ハイドリヒの意を汲んで起草したのはアイヒマン。下書きは1941年7月8日付。ハイドリヒがゲーリングの自筆署名(7月31日付)をもらう(VEJ 3:496)。

う延期できない」とハイドリヒが再度召集を掛けたのは1月8日付であった。これで20日のヴァンゼー会議開催が確定した。まさに、グローバルに結びついた世界戦争への突入こそは、全ヨーロッパのユダヤ人問題を考える枠組み、中央諸官庁の全体的解決のための準備会議を規定した。

【「最終解決」の対象】

議事録では「ヨーロッパ・ユダヤ人問題の最終解決」で対象となるユダヤ人を1100万人とした。しかし、ほとんどの国でユダヤ人はその宗教によって把握されていただけであった。ドイツの人種法に照応した統計ではなかった。したがって、1100万人は宗教分類による人口であり、それらが住むヨーロッパ諸国はAとBに分けられた。Aに分類された諸国は、1937年国内のドイツとドイツによって占領されるか編入ないし併合された諸国・地域（オーストリア、ポーランドからの編入東部地域、ポーランド総督府、ピアウイストク、保護領ベーメン・メーレン、エストニア、ラトヴィア、ベルギー、デンマーク、オランダ、ギリシャ、ノルウェー）であった。例外はドイツに占領されていないヴィシー政府領域のフランスがAに分類されていた。すべての国にそれぞれのユダヤ人人口が掲げられていた。エストニアは、このヴァンゼー会議時点では「ユダヤ人無し」と。ドイツ軍進駐の時にはエストニアにはまだ約1000人いた。そのうちごく少数のみが逃げることができた。その他全員が1941年末までにエストニア治安警察の部隊によって殺害された。Bに分類されたのは、同盟諸国（ハンガリー、クロアチア、スロヴァキア）、占領諸国（アルバニア、セルビア、ウクライナ、白ロシア）。このグループには、中立諸国（スイス、スウェーデン、スペイン、ポルトガル、トルコ）とイギリスとアイルランドも（VEJ 6:42）。

ハイドリヒはまずドイツと保護領からユダヤ人を「運び去ることになる」と予告した。引き続いてヨーロッパを西から東に「梳く」ことになる、と。これに対し、クラカウからやって来た総督府次官ビューラーは、総督府から始めていただきたいと申し出た。ここでは輸送問題が関係ないからだど

した。しかも、総督府のユダヤ人はほとんどが労働不能で、伝染病保菌者や闇商人として総督府の「経済構造を不断に無秩序にしているから」であった（ヴァンゼー会議記念館（編著）2015, 164-167）。実際に、総督府のユダヤ人はすでに1942年3月から近くに設置された絶滅収容所に追放された。すなわち、エンジン排気ガスの一酸化炭素ガスにより殺害された（永岑 2022a, 252-262）。これに対し、西ヨーロッパからの大量追放は、フランスからの捕虜輸送を例外として、ようやく42年7月に開始された（VEJ 6:42）。

【紛糾した問題——「混血児」の取り扱い】

ハイドリヒは会議後、ヴァンゼー会議議事録とともに「混血」の取り扱いに関する継続会議の招待状を送付した。この点は、1942年1月20日の会議で紛糾し、合意形成ができなかった問題であった。そこで42年3月6日、参加者の構成は変わったが、ベルリン・クーアフルステン通りのアイヒマン事務所で改めて議論された。特別難しかったのが「第一級混血児」問題だった。すなわち少なくとも2人のユダヤ人祖父母を持つユダヤ人を例外なく追放するか、あるいはドイツにとどまらせて強制断種するかで議論が紛糾した。内務省次官シュトゥッカーは「半ユダヤ人」をユダヤ人と同等とし、強制断種を支持した。しかし、この案は実際的な諸理由から実行不可であった。医者とベッドの不足から、全「半ユダヤ人」、その数7万人に断種手術するのは不可能だったからである（VEJ 6/87）。同年10月に「混血問題」継続会議直前になってようやくヒムラーによって奨励された産婦人科教授カール・クラウベルクの実験が進展し、アイヒマンは、「単純化されたやり方」で「処置が短縮され戦争中にでも実行でき」、問題の「解決」策として手術なしの大量断種の新方法の見込みができたと思った（VEJ 6/182）。妥協策として「混血児」を特別の都市でゲッターに隔離し、断種は戦後に延期するといった計画もあったが、具体化しなかった（VEJ 6/84, 87, 97）。

ユダヤ人混血児の状況はこのあと相変わらずまったく不安定であった。

日常生活は1942年はっきりと悪化した。法的状態の不明確さは多数の行政職員に「半ユダヤ人」の申請を却下させがちだった。さらに、「混血児」に関する諸規定が統一的に適用されなかった。国防軍はいわゆる「半ユダヤ人」を除隊させた。しかし、これもいつも必ずというわけでもなかった。少なからぬ大学やその他の教育機関が「混血児」の入学を許可した。しかし、別のところでは拒否された（VEJ 6:43）。

中央官庁官僚は強制断種か追放かの議論を続けた。その場合、1942年の労働力不足とも関連して、「最終解決」対象者約1千万のユダヤ人の中から労働能力ある2-300万人のユダヤ人を抜き出して強制断種し、労働力として使用するという発想もあった。この提案は42年6月23日、総統官房長代理ヴィクトール・ブラックからヒムラーに出された。ブラックは1939-41年の「安楽死」作戦に決定的に参加した人物で、42年に猛烈な勢いで進捗しつつあったラインハルト作戦に共同組織者として作戦現場責任者グロボチュニクの下に部下を要員として派遣し協力していた（VEJ 6:389）。グロボチュニクがブラックにガス室建設専門要員の提供を求めたさいの理由は、「全ユダヤ人作戦を可及的速やかに、何らかの困難が発生して作戦中止に追い込まれたりしないように、遂行するため」であった。作戦を「カムフラージュするため」にも、迅速さが求められていると（VEJ 6/130）。

1942年11月5日、ヒムラーがドイツ内にある全強制収容所からユダヤ人を追放し、全ユダヤ人をアウシュヴィッツ強制収容所とルブリン戦時捕虜労働収容所に移すことを命じた。したがって、ユダヤ人囚人の強制収容所への新たな収容はただちに考慮外となった。ユダヤ人囚人に第一級混血児も数えられていた（VEJ 6/187）。この時点までいわゆる混血児は、強制追放から除外されてきた。しかし、遂に第一級混血児はユダヤ人と等置され、例外措置がなくなった（VEJ 6:513）。

ヴァンゼー会議では「最終解決」遂行に立ちふさがり諸困難も議論された。ハイドリヒが恐れたのは、ユダヤ人の老人と第一次世界大戦で功績のあった退役軍人の追放に対する異議であった。抗議を回避するため、議事

録では65歳以上のユダヤ人と戦功勲章（一級鉄十字章）をもつユダヤ人は「疎開させず」、テレージエンシュタットに予定の老人ゲッターに送ることとした（ヴァンゼー会議記念館（編著）2015, 152-153）。プラハから約70キロの軍隊駐留都市テレージエンシュタットは当時、すでにチェコ・ユダヤ人を「東方への」追放前に閉じ込めておくゲッターになっていた（VEJ 6:44）。

4. ドイツ・西欧から総督府への強制追放——1942年——

総督府のユダヤ人約200万人が1942年のうちに犠牲となったラインハルト作戦についてはすでに詳しく見たので（永岑2022a）、この節ではドイツのユダヤ人がどのように総督府へ送られ、犠牲となったかを見ておくことにしたい。

ヴァンゼー会議の六日後、1942年1月26日、ヒムラーはドイツから強制収容所への15000人のユダヤ人の追放を強制収容所監督官グリュックスに前もって知らせた。その理由付けが42年1月20日のヴァンゼー会議前後の戦況を象徴的集約的に示していた。すなわち、「近いうちにはロシア戦時捕虜を期待できないので」、ドイツから移住するユダヤ人男女を大量に収容所に送り込むことになる、と（VEJ 6/69）。東部戦線は、ロシア・ソ連の反撃でむしろドイツ側に被害が増大する状況下であり、捕虜を執ることなどできないことをこうした秘密文書が明らかにしているのである。そして、こうした第三帝国の苦境は、同時に、国内ユダヤ人の追放圧力を強めることになる。それは、福音主義教会が“Sie ist antijudisch”と「反ユダヤ主義」を宣言し、ヒトラー『わが闘争』第一巻第3章の参照を求めながら「ドイツ民族教会（Deutsche Volkskirche）」と名乗ることにもつながり、追放圧力ベクトル群の一つを形成（VEJ 6/70）。

この全体的状況下、ヴァンゼー会議の11日後、アイヒマンはユダヤ人追放の新しい調整に突進した。すなわち、1942年1月31日付速達でズデーテンガウを含む全ドイツ各都市とウィーンのゲシュタポ支局、およびウィーン・

ユダヤ人移住センターに宛てて「ユダヤ人の疎開」、すなわちユダヤ人追放の指針を与えた（VEJ 6/72）。最近各地で遂行された「東方へのユダヤ人疎開」は、ドイツ、オストマルク（オーストリア）、プロテクトラート・ベーメン・メーレンにおける「ユダヤ人問題の最終解決の開始」を意味している、と。その措置は何よりも「特別緊急の計画」に関係していた。東方における受け入れ可能性の限界と輸送困難に鑑みて、作戦は一部のゲシュタポ支局からの疎開のみを考慮したものだ。しかし目下、ドイツ、オストマルク、プロテクトラートからのユダヤ人追放のさらなる割り当てを目標に、新たな受け入れ可能性を開拓しているところであった。今後の疎開作戦の正確な立案と準備には、まだドイツに住んでいるユダヤ人について、疎開対象からの除外者（ドイツ人とユダヤ人の混合婚、外国籍ユダヤ人、戦時重要労働に配置されているユダヤ人、65歳以上のユダヤ人、55-65歳で特に虚弱で輸送不可能老人など）の特定など詳細を確認しておく必要があった。その指針を送付したのである。

一か月ほどの準備を踏まえ、アイヒマンは42年3月6日、次の移送を予告した。55000人のユダヤ人がドイツとプロテクトラートから東方へ「労働配置」のために運ばれることになる、と。リガへの追放に関連して苦情がでたことから、アイヒマンは該当者の年齢や虚弱性について指針で示した諸規定を正確に守るよう伝達した。「煩わしい老人」は厄介払いし、「メンツを守るためテレージエンシュタットに送ることになろう」と（VEJ 6/83）。当面最後のリガへの輸送は、2月6日にウィーンを発っていた。満4週間の中断後、3月11日、強制追放の新たなシリーズが始まった。6月半ばまでに数日の間隔を置きながら、少なくとも43本の列車がそれぞれ約1000人のユダヤ人男女を乗せてドイツ、ウィーン、プロテクトラートの諸都市から総督府ルブリン地区に運ばれた。研究によれば、実証可能な43本のほかにも移送列車があり、総数約55000人のユダヤ人が60本の列車で総督府に追放された（VEJ 6:63）。

東部戦線での国防軍の1942年夏の攻撃の妨げにならないように、ユダヤ

人輸送は4週間近く再び中断された。次の輸送は7月11日、3本の列車で、ハンブルク、ビーレフェルト、ベルリンのユダヤ人がルブリン県とワルシャワ・ゲットーへ、さらに可能性としてはアウシュヴィッツへ運ばれた。総督府のドイツ行政当局は到着した移送列車に対してもはや何の抗議もしなかった。ヴァンゼー会議に出席した総督府次官ビューラーは、可及的速やかに「ユーデンフライ」（ユダヤ人ゼロ）にして欲しいと迫っていた。ところが、3月はじめ、「今後数か月、総数14000人のユダヤ人が暫定的にルブリン県に滞在することに同意する」と表明した。ビューラーは、ユダヤ人が総督府にいつまでも留まることはないと思っていたのである。なぜなら、すでに3月半ば、ベウジェツの絶滅収容所が稼働していたし、すぐ後にはソビボールの絶滅工場が稼働するからであった。42年3月からアウシュヴィッツもユダヤ人移送ないし「疎開」の目的地になっていた。アウシュヴィッツ収容所指導部はこの時期、郊外ビルケナウの二軒の農家をガス室に改造させた。また、さしあたり一棟のガス室併設火葬場（クレマトリウム）を、その後4つの火葬場を建設することを計画した（VEJ 6:63; VEJ 16/36）。このガス室併設火葬場がビルケナウに完成するのは43年春以降であった。

総督府への最初の4列車はルブリン南東のイズビツァが行先であった（VEJ 6/278）。プロテクトラート、コブレンツ、ニュルンベルクのユダヤ人が当地に到着した直後、イズビツァに住んでいるポーランド・ユダヤ人の絶滅がベウジェツで始められた（VEJ 6:63）。ドイツ、オーストリア、チェコのユダヤ人は、イズビツァおよびその近隣、そしてワルシャワ・ゲットーに送り込まれ、少しの間は恐るべき劣悪な環境でさしあたりは生き延びた。なかには故郷の親類にはがきを書き、食料を送ってくれるよう頼むことができたものもいた（VEJ 6/278）。1942年4月半ばから移送列車はルブリン経由でマイダネクに送られ、若くて力のある男子が強制労働者として「戦時捕虜収容所建設のためと称して」抜き出された。42年6月、少なくとも3列車のドイツとプロテクトラートからユダヤ人がその直前に完成したソ

ビボール絶滅収容所に直接送り込まれ、そのガス室で殺害された (VEJ 6:64)。

1942年3月はじめ、ベウジェツ絶滅収容所が稼働。ここには当初総督府の労働不能ユダヤ人が送り込まれた。3月16日から4月20日の間、親衛隊警察指導者グロボチュニクがルブリンのゲッターを大々的警察動員で一掃した。30000人のゲッター住人がベウジェツに連行され、そこで殺害された。そのほか多数がゲッター内で射殺された。この県の他のゲッターも少し後に一掃され、4月半ばまでにそこからベウジェツに送られた。その後、この収容所は拡張工事のため一時的に閉鎖された。5月はじめからルブリン県のユダヤ人はソビボール絶滅収容所に追放された (VEJ 6:64)。

ガリツィアのレンベルク (リヴィウ) では親衛隊がウクライナ人予備隊と一緒に1942年3月、同様に大「作戦」を実行した。彼らはまずユダヤ人の生活保護受給者にターゲットを絞った。しかし、この方法では犠牲者を十分な数だけ集めることはできないので、過ぎ越しの祭り前夜、ユダヤ人住宅を襲撃し、無境に人々を逮捕し、ベウジェツへの列車に詰め込んだ。ガリツィア県の他の町村でも警察部隊が手入れを行い、ユダヤ人を多数逮捕し、絶滅収容所に送致した (VEJ 6:64)。

ゲッベルスは、1942年3月7日の日記でアジアでの戦況、ロシアの戦況、イギリスの政争、戦争終結後のインド独立をめぐる論争など世界情勢を書き留めながら、「ユダヤ人問題最終解決についての保安部・警察の詳しい報告書」(すなわち内容からしてヴァンゼー会議議事録と思われる)を入手して読んだ考えも記している。その文書からゲッベルスには「ものすごい数の新しい観点」が判明した。ヨーロッパには「まだ1100万人ものユダヤ人がいるのだ」。彼らは今後「まず東部へ集中」されなければならない。場合によっては戦後どこかの島、例えばマダガスカルに割り当てられるだろうと。マダガスカル計画がかなり前に放棄されていることは知らなかつ

たようである²⁴。彼は、半ユダヤ人、ユダヤ人と親戚関係のもの、婚姻関係者などはどうなるのだと議事録でも紛糾した論点に問題を感じている。しかし、「いまやユダヤ人問題の最終解決をもたらす機は熟したのだ。後々の世代のためにもラディカルで断固とした措置を執らなければならない」と(VEJ 6/85)。

その後、進行している東方移送の実態を知ったゲッベルスは、1942年3月27日の日記にユダヤ人が今や総督府から、ルブリンを手始めに、「東方へ追放」されことになり、その際、相当に野蛮で、詳しくは書けないやり方が適用され、「その60%は抹殺され、40%が労働配置される」と記した。追放によって空きができたゲッターはドイツからのユダヤ人で「埋められ、ここではある程度の時間がたつと同じことが繰り返される」と(VEJ 9/54)。換言すればドイツ・ユダヤ人もポーランド・ユダヤ人に続くことになるというわけである。

1942年3月、ドイツ、オーストリア、保護領からの新しい追放循環がはじまったとき、同様にスロヴァキアから最初のユダヤ人が追放された。3月25日から4月28日の間に、8000人のユダヤ人男女が、アウシュヴィッツへの列車に強制的に詰め込まれた。2月に外務省はスロヴァキア政府に20000人のユダヤ人を東方での「労働配置のために」追放する用意があるかを尋ねた。だが、早くも4月11日から、ルブリン県に連行されるのはもはやユダヤ人労働力だけでなく、全家族となった。この強制追放は夏の間ずっと続けられた。10月20日に差し当たって最後の輸送がスロヴァキアから東方へ向かうまでに、57本の列車で総数57628人が移送された。そのうち、アウシュヴィッツに向かったのは18725人で、このうち42年末に生存していたのはわずかに500人から600人であった(VEJ 13:34)。

²⁴ 外務省のユダヤ人問題担当課ラーデマッハーは、1942年2月10日、外務省アフリカ担当官にこの間のソ連との戦争で可能性が出てきたこととして、「ユダヤ人をマダガスカルではなく東方に追放することを総統が決定した」と伝えている(VEJ 6/75)。

1942年4月10日、ヒムラーの代理人はスロヴァキア首相ヴォイテフ・トゥカにスロヴァキアのユダヤ人の「移住」は、ヨーロッパから東方への移住者50万人を予定している大規模プログラムの「ただ一部に過ぎない」と保証した。ドイツがユダヤ人を引き受ける最初の国スロヴァキアに続いて、占領下フランス、オランダ、ベルギーが続くことになると（VEJ 13/57）。実際には、フランスからの強制移送はすでに2週間前に始まっていた。42年3月30日、フランスその他の国籍の1112人のユダヤ人——彼らは多くが抵抗運動メンバーで襲撃後ドイツ占領者によって捕虜にされた人々——を乗せた最初の移送列車がアウシュヴィッツに到着した。6月5日から7月17日までにアウシュヴィッツへの移送が継続し、またもや捕虜として逮捕された約4700人が追放された。そのほとんどはフランス国籍ではなく、圧倒的多数を占めたグループはポーランド系男性であった（VEJ 6:65）。

5. 1942年夏のユダヤ人殺戮急進化

1942年春までドイツとプロテクトラートから移送されたユダヤ人、並びにスロヴァキアとフランスから移送されたユダヤ人も概して目的地のゲットーないし収容所に割り当てられた。多くの場合、直前に絶滅収容所に追放されて空き家・空き部屋になったユダヤ人の家に（VEJ 6:65）。

ヒムラーとハイドリヒが4月と5月に何度も間を置かずに会い、42年5月、ドイツから次の一連の移送が始まった。ゲッベルスは、5月30日にヒトラーと会って、ベルリンのユダヤ人の追放を相談した。ゲッベルスは、ベルリンからユダヤ人を「完璧に一掃」する計画をヒトラーに提示した。ヒトラーはまったく彼の意見に賛成し、シュペーア軍需大臣に対し、可及的速やかにドイツ軍需工業に就業しているユダヤ人を外国人労働者で置き換える課題を与えるとした。ゲッベルスは帝国の首都で4万人のユダヤ人が「もはや何も失うことなく自由でいられる」などということは、非常に大きな危険だとみなした。その状態は「まさに暗殺への挑発であり勧誘」

に他ならなかった (VEJ 6/118)。

この発想の前提には、ゲッベルスが企画し5月8日から開始した宣伝展示会「ソヴィエトの楽園」(ベルリン・ルストガルテン)に対し、5月18日にヘルベルト・ブラウン率いる共産主義抵抗運動が仕掛けた襲撃放火事件があった。その展示会は、「ソヴィエトの楽園」がいかにみじめでひどいものであるかを暴露し、ベルリン市民に大々的に宣伝するはずのものだった。それが襲撃を受け、破壊され炎上したとなると、ゲッベルス、ベルリン治安当局の面目は丸つぶれであった。遠くの東部戦線での「最初の敗退」と首都ベルリンにおける抵抗運動の展示会焼夷弾攻撃事件とは、「ユダヤ・ボルシェヴィズム世界の敵」の力を示すものであり、その原因だと断定するものを徹底的に排除しなければならなかった²⁵。ベルリンの責任者、全ドイツの啓蒙宣伝相としてのゲッベルスにとって、ベルリン・ユダヤ人の完璧な追放は必然的要請となった (VEJ 6:363; 6/157)。ベルリン、プラハ、ウィーンのユダヤ人代表者には、250人のユダヤ人の射殺を周知する義務——サボタージュ活動参加者を割り出す仕事——が課せられた (VEJ 6/117)。

追放圧力はドイツ全土で、特にベルリン、ウィーン、プラハで高まったが、それだけではなかった。プロテクトラートでも小さな町や村のユダヤ人がますます多く追放されるようになった。42年9月までに総数16000人のユダヤ人が、17本の列車でドイツ、オーストリアの諸都市そしてプロテクトラートからミンスクへ送られた。これ以前の強制追放と違って、ユダヤ人は当地のゲットーに割り当てられるのではなくて、ゲットーから数キロ離れたミンスク郊外の農場——治安警察が42年春に没収していた——で殺害

²⁵ 焼夷弾攻撃に参加した電気技師ブラウン——ドイツ・ユダヤ人青年同盟の指導者、1933年以降非合法に共産党のために活動——のほか、彼の妻Marianne、Heinz Joachim, Irene Walther, Gerhard Meyer, Sala Kochmann, Susanne Wesseが5月18日から27日の間に逮捕された。彼らに下された死刑判決は、8月18日に執行された。さらに、このグループ周辺でたくさんの逮捕が続いた。逮捕者に対する三つの裁判も行われ、処刑が執行された (VEJ 6:442)。

された。41年末にドイツからリッツマンシュタットのゲッターに移送されたユダヤ人も、42年5月に殺害された。彼らは——それ以前のリッツマンシュタットのポーランド・ユダヤ人と同じく——クルムホーフに連行され、そこでガス自動車で殺された。オストオーバーシュレージエンのカトヴィッツに近いソスノヴィッツとベンジンからは、42年5月12日に追放が行われた。ドイツ人が価値ある労働力とはみなさなかつたユダヤ人約34500人がこれらの町の中で選別され、近くにあるビルケナウ絶滅収容所に連行され、それ以上の選別はなされずに農家改造ガス室で殺害された。5月末、治安警察はクラカウ県からのユダヤ人追放を開始した。戦時重要労働に従事しているということを証明できたものはひとまず逃れることができたが、そのほかのものはちょうど拡張されたばかりのベウジェツの絶滅収容所への列車に詰め込まれ、到着後そこで殺害された (VEJ 6:65-66; VEJ 9:25)。

ポーランド占領地におけるユダヤ人殺害は、ハイドリヒが1942年6月4日に暗殺の結果として死去した時には、すでに真っ最中であった。ベルジェツ、ソビボール、トレ布林カの絶滅収容所で行われる総督府のユダヤ人殺戮は、ラインハルト作戦 (Aktion Reinhardt) と称されることになった。42年7月21日、ワルシャワのユダヤ人の殺害が開始された。9月までに少なくとも250000人のユダヤ人がそこからトレ布林カ絶滅収容所に強制追放された。総督府の別の地域でも、占領者は同じように過酷な措置を執った。ラドム県からは42年8月4日から11月7日の間に310000人から325000人がトレ布林カで殺害された (VEJ 6:66)。ソ連占領諸地域でも42年2月から絶滅政策は加速された。殺害は当地に住むロマ (ジプシー) にも拡大された。彼らには、占領者からすればユダヤ人と同じように、一般的にスパイの疑いがかけられたのである。すでに41年秋、個々のユダヤ人共同体が広く解体されていたが、その後、42年春、新たな大規模な射殺キャンペーンが繰り広げられた。白ロシアやウクライナでこれ以前にはまだ存続していたユダヤ人共同体がもはや例外とはされなくなった。42年3月と4月、アイヒマンとヒムラー、ハイドリヒが相次いで白ロシアのミンスクを訪れ

た。アイヒマンは42年3月、ドイツからミンスクへのユダヤ人移送再開を企図したものと思われ、その機会にユダヤ人の子どもの大量殺害を視察した (VEJ 6:67)。

ウクライナでも1942年末までにユダヤ人がほぼ全員殺害された (VEJ 8:28)。白ロシアではさしあたり、ドイツ民政当局と治安警察が労働力として必要と認めたものは生きながらえた。いくつかの町村ではユダヤ人評議会が前もって労働能力あるユダヤ人をリストアップしなければならなかった。リストに乗っていない何千人かは事前に掘られた大量墓のそばで射殺された。42年7月末、ミンスクで10000人射殺されたが、その中には初めて3500人のドイツ・ユダヤ人もいた。彼らはそれまで当地のゲットーの隔離地区で宿泊していた。白ロシアでは総数で42年に約115000人が殺された。その半分は5月はじめから8月初めまでの間であった。彼らはドイツ占領者にとって「無用の大食漢」であり、彼らの扶養は食料バランスへの重荷でしかなかった (VEJ 6:67)。

ドイツ占領下西ヨーロッパ諸国家でも、ドイツ占領者は1942年、ユダヤ人の殺害政策に移行した。ハイドリヒはパリで42年5月6日、占領地域からの無国籍ユダヤ人の追放を予告した。それに従ってすでに6月中に幾本かの移送列車がアウシュヴィッツへ向かった。42年6月11日、ユダヤ人問題担当官がパリ、ブリュッセル、ハーグから帝国保安本部に集まり、フランス、ベルギー、オランダからのユダヤ人追放の計画を練った。それにより、オランダから15000人、ベルギーからさしあたり10000人、フランスから100000人をアウシュヴィッツに追放することが決められた。

だが、フランスの目標とされた追放者数は非現実的なことが直ちに判明した。なぜなら、ドイツ占領当局はそのように多数のユダヤ人を短期間に掌握できなかったからである。そこでフランスからの追放人数を40000人に引き下げた。だが、オランダからも同じく40000人が東方への列車で追放されることになった。6月半ば、ドイツ当局は占領下フランスの当局に無国籍ユダヤ人の追放を迫った。7月半ば、フランスの警察はパリの手入

れで13000人の無国籍ユダヤ人を逮捕した。そのうちの5000人——その中には多数の子供もいたが——はその後アウシュヴィッツへ追放された。フランス国籍ユダヤ人の追放はこの時点ではまだ実行できないとみなされた。それがフランス行政当局の協力（コラボラシオン）に悪影響を及ぼしうることからであった。ドイツ占領当局は人員不足からしてフランス当局の協力を頼らざるをえなかったのである（VEJ 6:67）。

外務省は42年7月29日、ヴァンゼー会議出席のルター次官補署名の速達で、アイヒマンに、占領下フランス、オランダ、ベルギーから「アウシュヴィッツでの労働配置に外務省としてはなんの懸念もない」としたうえで、しかし、「精神的反作用を考慮して」、まずは無国籍ユダヤ人をアウシュヴィッツへ追放するように要請した。その数は「オランダだけで25000人」にのぼっていた。同じ理由で、ブリュッセルの軍政当局も、「まずはポーランド、チェコ、ロシア、その他のユダヤ人」を選び出すように求めていた（VEJ 6/147）。

オランダから東方への最初の追放は、1942年7月15日にヴェステルボルク収容所を出発した。8月4日、ベルギーから初めて998人のユダヤ人が追放された。この輸送及びその後のほとんどの輸送の行先はアウシュヴィッツだった。そこの積み下ろし場で労働能力の観点から選別された。子供たち、同伴の母親や老人——ほとんどが50歳以上——は、アウシュヴィッツ到着直後、農家改造ガス室で殺された（VEJ 6:68）。

占領下ポーランドのゲットーでもまだドイツで生活しているユダヤ人でも、仕事場、しかも特に軍事生産の仕事場は、追放から——少なくとも一時的に——免れることを意味した。ゲットーでは新しい労働証明書が発行され、それが所持者を差し当たって守った。それに対し、労働能力のないユダヤ人や生活保護受給者は優先的に絶滅収容所への追放に選ばれた。もちろん、強制的にリクルートされた人々の宿泊や食料は非常に破滅的なもので、一方では多くが短期間ではやくも労働不能となり、他方ではすべてのかなり大きな諸都市にあった収容所から逃げ出そうと試みた。1942年4

月から7月に42000人の強制労働者が逃亡を企てた。ゲシュタポは、外部への出口道路とすべての農民屋敷への厳格なコントロールシステムを導入し、逃亡者逮捕に努めた (VEJ 6:68)。

同じ時期、ドイツからテレージエンシュタットへの輸送も始まった。軍事的制約による交通封鎖のため、1942年6月と7月、ベルリンからのドイツ・ユダヤ人は普通50人から100人の小さなグループで特別貨車に、しかし時刻表通りの列車で「高齢者ゲッター」なるところに連行された。これに対して、ウィーンから、また散発的だがケルン²⁶、ハンブルク、ハノーファー、アーヘン、トリア、ミュンスター、プレスラウとケーニヒスベルクからも、この時期すでにそこへの大規模輸送が運行した。8月からは頻繁に全ドイツからの特別列車がテレージエンシュタットに到着した。それらにはそれぞれ1000人のほとんどが老齢ユダヤ人男女並びに戦争勲章授与の元前線兵士が連行された。さらにプロテクトラート・バーメン・メーレン全域のチェコのユダヤ人を乗せた輸送も絶え間なく到着した。42年6月から10月までに総数40000人のドイツ、オーストリアのユダヤ人が、その間に完全に過密になっていた小都市にやってきた (VEJ 6:68)。

1942年10月からはほとんどの東方輸送列車が直接アウシュヴィッツへ向かった。ベルリンからのユダヤ人は大部分が絶滅収容所に送られ、ほかの都市からは3列車のみであった。その3列車は43年3月はじめ、シュトゥットガルト、デュッセルドルフ、ドルトムント、さらにハノーファー、エア

²⁶ ライン河主要都市への空襲が激化していた。1942年6月9日、ケルン市長は空襲被害の市民に追放ユダヤ人の引っ越し荷物を提供する提案を行った (VEJ 6/122)。翌6月10日、ケルンへの大々的爆撃があった (VEJ 6/123)。デュッセルドルフの一度もユダヤ教共同体に加わったことがなく、それまでは「第一級混血児としてユダヤ人に分類されていなかった」17歳のある若者は、6月12日、東部へ移送される母に同行するため、わざわざユダヤ教に「自発的に」改宗し、ユダヤ人になった。一人デュッセルドルフに残っても生活の道がなかったからか、「移送」の表面上の言葉を信じ生存の可能性に夢を託したか。母と彼は6月15日、ソビボルに送られ、そこで殺害された (VEJ 6/126)。

フルト、ドレスデン、そして最後にプレスラウからのユダヤ人を連行した。3月はじめに移送された人々の中にはベルリンのユダヤ人労働者も含まれていた (VEJ 6:69-70)²⁷。

むすびにかえて

強制追放が始まって以降、そしてさらには強制追放されたものの運命についての噂がますます不安を増大させるなか、たくさんのユダヤ人が逮捕を免れようと決断した。ベルリンでは総数7000人のユダヤ人が自ら命を絶つたとされる。1941年10月にリッツマンシュタットへの移送が始まったとき、すでに自殺が頻発した。その多さは第三者の観察者の注意も引き、日記に書き留められた (VEJ 6/17)²⁸。フランクフルトのイタリア総領事は1942年6月25日付で、春の初めにまだフランクフルトで生活していた7000人のユダヤ人のうち、5月はじめにゲシュタポの命令で1500人がポーランドに連行されることになり、突然文書で住居を立ち去ることを命じられ、まとめて収容所に入れられ、次々に駅に連行されたこと、しかし、出発前に130人が自殺したことを報告していた。彼はまた大管区指導者の告知通りなら、年末までにフランクフルトの全ユダヤ人が追放されることになるかと報告していた (VEJ 6/128)。あるユダヤ人独身女性は知り合いの70人が自殺したことを私信に書いた。それは摘発され、特別裁判所で「国家敵対的表明」と断罪され、7カ月の禁固刑に処せられた (VEJ 6/88)。

²⁷ 1942年に急激に進行したユダヤ人追放と大量殺害については、いろいろの筋から世界中でニュースになった。The Manchester Guardian vom 30. Juni 1942 (VEJ 6/136) ; Jewish Tetegraphic Agency: Artikel vom 22. Juli 1942 (VEJ 6/145)。そして世界のユダヤ人組織は連合国に犯人を報復で脅かし、さらなるユダヤ人の被害を抑止しようとした (VEJ 6/179)。

²⁸ この事実を日記に書き留めた人物 (神学者・ジャーナリスト・作家のヨッヘン・クレッパ、1923-32社会民主党員) も、結局は1942年妻と娘と自殺した (VEJ 6:136)。

あるオーストリアのユダヤ人女性は、1938年にアメリカに移民した小児科医の友人に宛て、42年7月、これまでの「不断の悪夢」を訴え、「いわゆるゲットーへの連行」には決して従わない決断を伝えた。そして、自殺のために十分なヴェロナールを手に入れることに成功してからは、心安らかになったと知らせた (VEJ 6/147)。刑事警察には、錠剤やガスによる中毒死や窓からの墜落あるいは溺死の場合、本当に自殺なのかどうか、そもそも死亡通知があっても本当に死体があるのかどうか、再調査したたくさんの調書が残されている。家族親類を危険にさらさないように自殺と見せかけて失踪する事例もかなりあったようである (VEJ 6/149)。特に43年2月にベルリン・ユダヤ人に対する最後の大々的追放 (暗号名「工場作戦」) のころ、すでにほとんどの年配のユダヤ人男女が追放されてしまっていた。少なくなった残留者への追跡が激しさを増すなかで、特に多くのものが地下に潜る決断をした。見積もりでは、全部で10000人から12000人、ベルリンだけで——当時のドイツ・ユダヤ人の約40%がベルリンに——6000人から7000人のユダヤ人が地下に潜る道を選んだとみられる。ただ、それは極めて厳しい条件下で可能であり、一人の地下生活者には平均7人の支援者が必要だった。ベルリンだけで約30000人だった、と (VEJ 6/78)。もちろん、抵抗や抵抗グループも数少ないながらあった。だが、それは苛烈に徹底的に鎮圧された (VEJ 6/68-69)。

1942年8月中には、シオニスト世界組織ジュネーブ事務局のリヒトハイムは、非ユダヤ人の情報提供者やその他の情報源から、「多数のユダヤ人が最近数週間にワルシャワ・ゲットーからほかの場所に送られている」こと、そしてテレージエンシュタットや占領諸国から「東方の未知の場所に」追放されていることを確認した。また、最近ドイツ、オーストリアその他からポーランドやテレージエンシュタットに送られたユダヤ人が「手紙を書くことも住所を伝えることも許されていない」ことも事実だと確認していた。それらの情報の中には「イギリスやアメリカの読者には信じられないような情報」も含まれていた。それは、「この戦争の終結時にはヨーロッ

「パ大陸にユダヤ人がもはや存在しないというヒトラーの布告に照応」するものだった (VEJ 6/160)。

1942年12月17日、連合国は、野蛮な体制が「ヨーロッパの全ユダヤ民族を根絶するというヒトラーの繰り返し表明した計画を実行している」として、ドイツ支配下のユダヤ人に対する犯罪の責任者を処罰すると公式に威嚇した。ユダヤ人が恐るべき条件のもと、残酷きわまりない方法で占領諸国から東ヨーロッパに移送されている、と。しかし、この声明においては、ユダヤ人の野蛮な取り扱いや労働、疲労困憊や飢餓による絶滅、大量射殺に関しては言及があったが、まだ絶滅収容所については触れてなかった (VEJ 6/202)。また、その重々しい態度表明にもかかわらず、連合国はなお生存しているユダヤ人の救出よりもドイツの軍事的敗北を優先した。体系的なユダヤ人大量殺害の情報は、まだ、連合国側において必ずしも信用されていなかった (VEJ 6:82)。

戦時下で戦闘と占領の状況も変化する中で当然のことながら、情報は必ずしも正確ではなかった。広く流布した噂には、無差別に殺されたユダヤ人の死体が「油脂の製造のため、あるいは骨が肥料に使用される」といった証拠のないものがあった (VEJ 6/160, 174, 192)。それでも大規模な殺戮が行われているという基本的部分は正確な情報だったとみるべきであろう。1942年6月30日のマンチェスター・ガーディアンは「ユダヤ人の戦時犠牲者、100万人を超える」と伝えた。戦争開始からおよそ100万人以上が殺されるかドイツ国内およびドイツ占領下の国々における虐待で死んだ。そのうち約700000人がポーランドとリトアニアで、さらに125000人がルーマニアで死んだと (VEJ 6/136)。この情報源は、42年5月11日のワルシャワからの報告であった。ユダヤ人組織ブントがユダヤ人に対する計画的な大量殺害を報告し、それをストップさせることを求めたのである (VEJ 9/74)。

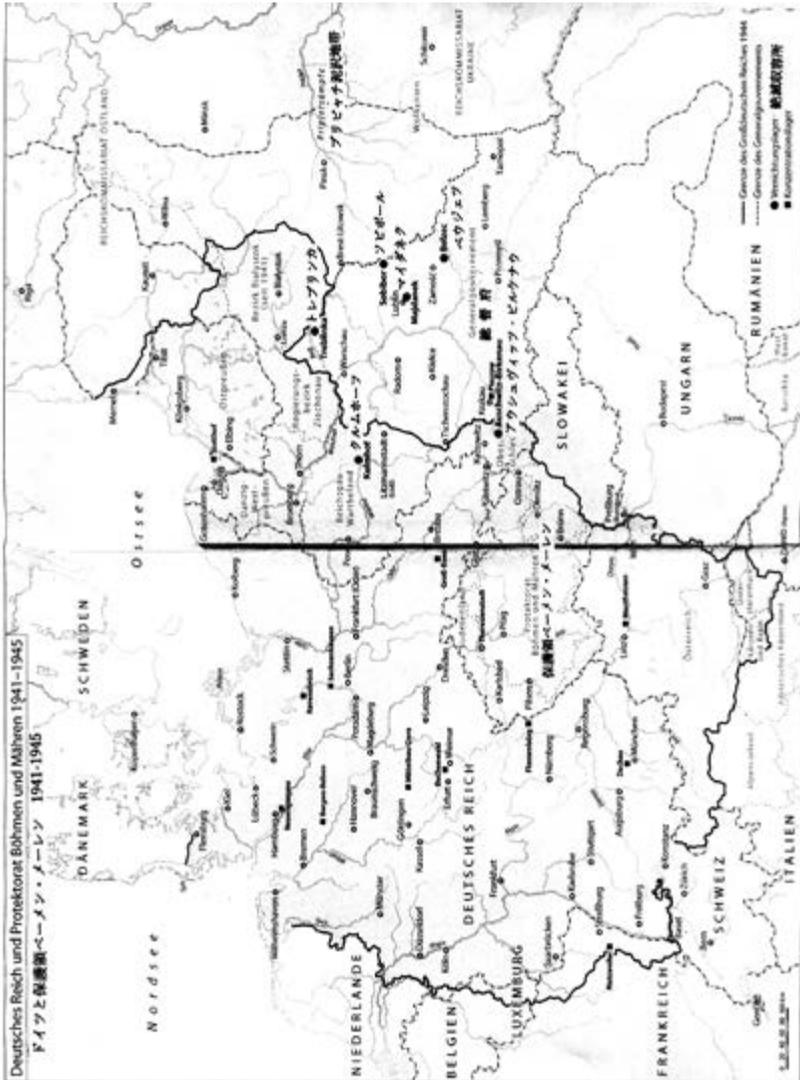
スターリングラード敗北の直後、1943年2月13日、ゲッベルスは15000人の聴衆を前に、有名な長大な演説を行った。すなわち、ドイツ国防軍が東部からの危険を打ち破ることができなければ、ドイツ、それに直結して

全ヨーロッパがボルシェヴィズムに打ち負かされる。ドイツ国防軍とドイツ人民は同盟国とともに、この危険からヨーロッパを根本的に救う力を持っている、と。「ボルシェヴィズムの目標は、ユダヤ人の世界革命だ」。ボルシェヴィズムはドイツとヨーロッパにカオスをもたらし、その結果発生する希望喪失状態と諸国民の絶望のなかで、「国際的な、ボルシェヴィキ的に隠蔽した資本主義的圧政」を樹立しようとしている、と (VEJ 6 /223)。

現実には、この全世界的対決のなかで、ナチス・ドイツは東方大帝国建設、世界強国建設という基本的目標 (民族主義的膨張) の実現には完全に失敗した。ユダヤ人殺戮だけ「ユダヤ人問題の最終解決」として実行した、民族至上主義の見地から、それしか誇るべきものがなかったということになろう。ヒトラーのベルリン総統大本営地下壕のなかでの遺言 (永岑 2022a, 16-17) の意味合いは、ここにあるだろう。したがって、第三帝国の敗退・敗北の結果でしかないことを、ヒトラー・ナチスの根本的な戦略目標だとは言えないであろう。

以上、VEJ 6 巻を主たる史料として、ドイツ・西欧からのユダヤ人の東方への移送政策から絶滅政策への段階的推移を独ソ戦から世界大戦・総力戦への展開との関連に的を絞りながら追跡してきた。

段階的推移の画期が、対米宣戦布告とこれに対応する米英中心の26か国連合宣言、すなわち枢軸国と連合国とのグローバルな激突開始にあったことは、実証的に確認できたといえるのではないだろうか。



文献リスト

1. 資料：『ナチス・ドイツによるヨーロッパ・ユダヤ人の迫害と殺戮 1933-1945』

引用表記：(VEJ 巻数: ページ数), (VEJ 巻数/ ドキュメント・ナンバー).

VEJ [2008-2021] *Die Verfolgung und Ermordung der europäischen Juden durch das nationalsozialistische Deutschland 1933-1945*. Herausgegeben im Auftrag des Bundesarchivs, des Instituts für Zeitgeschichte, des Lehrstuhls für Neuere und Neueste Geschichte an der Albert-Ludwigs-Universität Freiburg und des Lehrstuhls für Geschichte Osteuropas an der Freien Universität Berlin von Susanne Heim, Ulrich Herbert, Michael Hollmann, Hosrt Möller, Gerhard Pickhan, Dieter Pohl, Simone Walther und Andreas Wirsching, München/Berlin/Boston.

VEJ全16巻の詳細は永岑 [2022a] 文献リストを参照されたい。

本稿で主として利用する巻：

VEJ 3: *Deutsches Reich und Protektorat September 1939-September 1941*, München 2012.

VEJ 4: *Polen September 1939 - Juli 1941*, München 2011.

VEJ 5: *West- und Nordeuropa 1940- Juni 1942*, München 2012.

VEJ 6: *Deutsches Reich und Protektorat Oktober 1941-März 1943*, Berlin/Boston 2019.

VEJ 9: *Polen: Generaogouvernement August 1941-1945*, München 2014.

VEJ 11: *Deutsches Reich und Protektorat April 1943-1945*, Berlin/Boston 2020.

VEJ 12: *West- und Nordeuropa Juni 1942-1945*, Berlin/ München / Boston, 2015.

VEJ 13: *Slowakei, Rumänien und Bulgarien*, Berlin/Boston 2018.

VEJ 14: *Besetzte Südosteuropa und Italien*, Berlin/Boston 2017.

2. 著書・論文等（下記の抜粋的文献以外は永岑 [2022] 文献リストを参照されたい）

アーレント、ハンナ [2017] 『新版 エルサレムのアイヒマン——悪の陳腐さについての報告』大久保和郎訳、みすず書房。

ヴァンゼー会議記念館（編著）[2015] 『資料を見て考えるホロコーストの歴史——ヴァンゼー会議とナチス・ドイツのユダヤ人絶滅政策』山根徹也・清水雅大訳、横浜市立大学新叢書8、春風社。

大木毅 [2019] 『独ソ戦——絶滅戦争の惨禍』岩波新書。

カーショウ、イアン [2016a] 『ヒトラー 傲慢 1889-1936』石田勇治監修、福永美和子訳、白水社（Kershaw, Ian [1998] *Hitler. 1889-1936: Hubris*, London）。

— [2016b] 『ヒトラー 天罰 1936-1945』石田勇治監修、川喜田敦子訳、白水社（Kershaw, Ian [2000] *Hitler. 1936-1945: Nemesis*, London）。

木村靖二編 [2022] 『1919年——現代への模索』山川出版社。

ゴルバチョフ、ミハイル [2022] 『我が人生——ミハイル・ゴルバチョフ自伝』副島英樹訳、佐藤優解説、東京堂出版。

芝健介 [2008] 『ホロコースト——ナチスによるユダヤ人大量殺戮の全貌』中公新書。

栗原優 [1997] 『ナチズムとユダヤ人絶滅政策——ホロコーストの起源と実態』ミネルヴァ書房。

— [2023] 『ヒトラーと第二次世界大戦』ミネルヴァ書房。

トゥーズ、アダム [2019] 『ナチス 破壊の経済 1923-1945』上、下、山形浩生・森本正史訳、みすず書房（Tooze, Adam [2006] *The Making and Breaking of the Nazi Economy: The Wages of Destruction*, New York）。

永岑三千輝 [1994] 『ドイツ第三帝国のソ連占領政策と民衆 1941-1942』同文館。

— [2001] 『独ソ戦とホロコースト』日本経済評論社。

- [2003] 『ホロコーストの力学——独ソ戦・世界大戦・総力戦の弁証法』青木書店。
- [2007] 「特殊自動車とは何か——移動型ガス室に関する史料紹介」『横浜市立大学論叢』社会科学系列、56-3。
- [2021] 「第三帝国の全面的敗退とアウシュヴィッツ 1942-1945」同上、73-1。
- [2022a] 『アウシュヴィッツへの道——ホロコーストはなぜ、いつから、どこで、どのように』横浜市立大学新叢書13、春風社。
- [2022b] 「第三帝国敗退最終局面とハンガリー・ユダヤ人の悲劇——1944-1945大量殺戮の歴史的文脈——」『横浜市立大学論叢』社会科学系列、73-2・3合併号。
- ヘルベルト、ウルリヒ [2002] 『ホロコースト研究の歴史と現在』永岑 三千輝訳『横浜市立大学論叢』社会科学系列、53-1。
- [2021] 『第三帝国——ある独裁の歴史』小野寺拓也訳、角川新書 (Herbert, Ulrich [2016] *Das Dritte Reich. Geschichte einer Diktatur*, München)。
- Domarus, Max [1973] *Hitler. Reden und Proklamation 1932-1945*, Wiesbaden
- Herbert, Ulrich [2014] *Geschichte Deutschlands im 20. Jahrhundert*, München.
- Miyake, Masaki [2021] *Deutschland und Japan 1933-1975*, München.
- Shindo, Rikako [2013] *Ostpreußen, Litauen und die Sowjetunion in der Zeit der Weimarer Republik. Wirtschaft und Politik im deutschen Osten*, Berlin.

(投稿：2022年8月27日 初校：2023年3月27日)

